

平成30年度「高校生ステップアップ・プログラム」

実 施 報 告 書

1 「高校生ステップアップ・プログラム」とは P 1

2 各指定校の取組 (22校)

道 央	空知	(1) 北海道夕張高等学校	P 2
		(2) 北海道砂川高等学校	P 4
	石狩	(3) 北海道札幌北高等学校 (定時制)	P 7
		(4) 北海道札幌東豊高等学校	P 9
		(5) 北海道札幌あすかぜ高等学校	P 14
		(6) 北海道江別高等学校 (全日制)	P 17
		(7) 北海道有朋高等学校 (定時制)	P 19
	後志	(8) 北海道岩内高等学校	P 21
道 南	胆振	(9) 北海道追分高等学校	P 26
		(10) 北海道鶴川高等学校	P 32
	日高	(11) 北海道浦河高等学校	P 36
渡島	(12) 北海道函館中部高等学校 (定時制)	P 39	
	(13) 北海道函館工業高等学校 (定時制)	P 42	
道 北	上川	(14) 北海道旭川東高等学校 (定時制)	P 46
	留萌	(15) 北海道苫前商業高等学校	P 49
	宗谷	(16) 北海道稚内高等学校 (定時制)	P 53
道 東	オホーツク	(17) 北海道網走桂陽高等学校	P 56
		(18) 北海道興部高等学校	P 58
	十勝	(19) 北海道本別高等学校	P 60
釧路	(20) 北海道標茶高等学校	P 63	
	(21) 北海道弟子屈高等学校	P 67	
	(22) 北海道白糠高等学校	P 69	

3 高校生ステップアップ・プログラム実施要項 P 72

「高校生ステップアップ・プログラム」とは

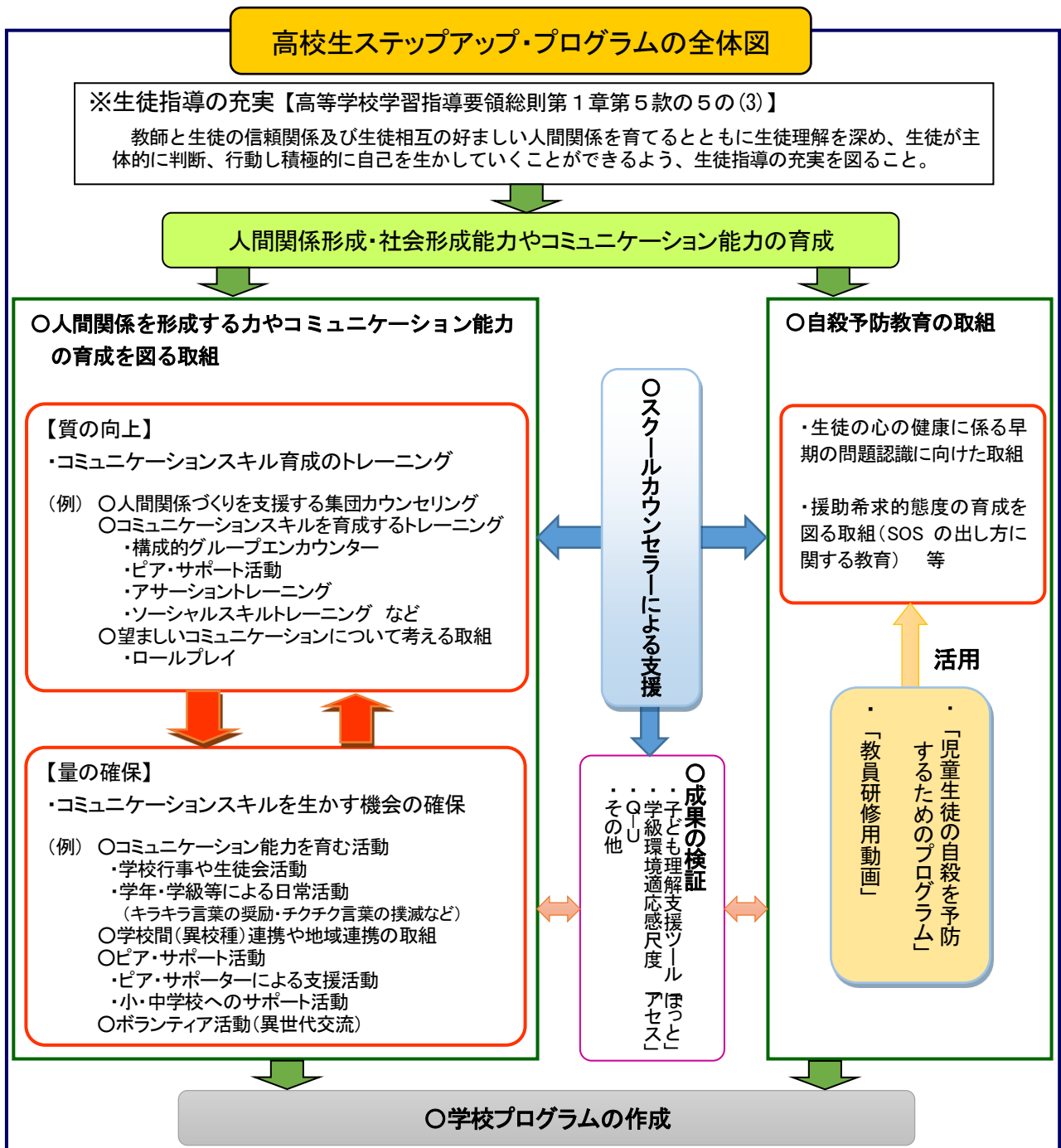
1 趣旨

高校生の不登校や中途退学の事由として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものがあり、心の不安定さから不登校や中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校における不登校や中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、生徒の心の健康に係る早期の問題認識や援助希求的態度の育成を図る取組、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組の実践及び教員への普及を図る「高校生ステップアップ・プログラム」を実施し、その成果等を全道に普及する。

2 事業内容

- (1) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組の実施
 - ア コミュニケーションスキルを育成するためのトレーニングの実施【質の向上】
 - イ コミュニケーションスキルを生かす機会の確保【量の確保】
- (2) 自殺予防教育の取組の実施
- (3) 成果の検証
- (4) スクールカウンセラーによる支援
- (5) 学校プログラムの作成



北海道夕張高等学校

課程：全日制
 学科：普通科
 生徒数：65名

本校の目指す生徒像

社会に通用する生徒 主体的で自律的な生徒
 粘り強く努力する生徒 チャレンジする生徒

本校の現状

人間関係に悩みを抱えたり、自信のなさが見受けられたりすることがあるため、望ましい支援や積極的な教育相談を推進する必要がある。

本校の取組の特徴

- (1) 望ましい人間関係を形成する力を育成する、ソーシャルスキルトレーニングの実施。
- (2) 生徒の発達段階や行事等の時期に合わせた、集団カウンセリングの実施。
- (3) 教育相談特別支援委員会を中心に取組んだ、各種アセスメントツールを活用した戦略的なホームルーム経営の検討及び実施後の検証。

取組の経過

C：カウンセリング

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月24日	上級学年への指導「リーダーとして下級生のまとめ方」		○		3学年
5月30日	宿泊研修「構成的グループエンカウンター・アサーショントレーニング」	○	○		1学年
6月7日	集団C 絵本を用いた「ZOOM～ノンバーバルコミュニケーション～」		○		1学年
6月14日	集団C「まなざしとところ」	○	○		3学年
6月14日	集団C「いじめる側からみたいじめ」	○	○		2学年
8月23日	集団C「椅子の座り方とコミュニケーション」			○	1・2学年
8月23日	個別C			○	全学年
8月28日	集団C「ストレスマネジメント～進路活動でのストレスを受け止める～」			○	3学年
8月28日	個別C			○	全学年
9月13日	個別C			○	全学年
9月19日	体育祭の日の朝学習「アサーショントレーニング～頑張っている仲間を応援するスキル～」	○	○		全学年
10月23日	個別C			○	全学年
12月6日	教育相談講演会「困っている仲間には手を差し伸べるには～相談の世界によろこそ～」	○	○	○	全学年
12月6日	個別C			○	全学年
12月27日	校内研修会「アセスメントツールの分析結果から見える、夕張へのコミュニティ支援の在り方」(講師:お茶の水大学准教授 青木紀久代)	-	-	-	教職員
1月30日	個別C			○	全学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

学年の生徒の状況や行事等の時期に合わせて、スクールカウンセラーによる集団カウンセリングや、学年の担当者によるアサーショントレーニング等の、ソーシャルスキルを育む取組を行った。問題が起きてから対処するのではなく、未然防止の観点から、見守りや教員間での情報共有を活発化させるとともに、予防的・開発的生徒指導に係る取組を重視して、意図的・計画的に年間計画に位置付けた。

2 自殺予防教育の取組

全学年を対象とした、スクールカウンセラーによる教育相談講演会を実施した。生徒からは、「相談を受けることは、相手に命を分けてあげること」等の話を聞いて、「今いる自分の友達を大切にしよう。自分が困った時には、自分だけで解決しようとするのではなく、友達にも相談してどのように解決していくか考えたい。」「自分だけで悩まず、相談することの大切さがよく分かった。」「今まで相談するのも受けるのもあまり得意ではなかったので、これからは学んだことをいかしたい。」等の感想があった。

3 スクールカウンセラーによる支援

ほっとやQ-U、くらしと学校生活の健康調査等のアセスメントツールの分析結果に基づきつつ、担任の思いも踏まえて、スクールカウンセラーに集団カウンセリングを実施していただいた。普段から、集団カウンセリングの視点をもって授業を行うことによって、個別の生徒の相談件数も増え、気軽に相談してみたいという生徒が増えた。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

スクールカウンセラーによる各種アセスメントツールを使った生徒の状況分析の結果から、「先生方に対する生徒の信頼度は高い」という結果が得られた。引き続き、頼れる身近な大人として、適切な支援を続けていきたい。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

平成30年度の中途退学者数は1名であった。不登校傾向にある生徒が5名おり、生活習慣の定着に向けて支援を行っている。いじめの認知件数は、昨年度は5件あったが今年度は1件となった。認知した1件は現在では解消しており、解消率は100%である。

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

各種行事において、人間関係でのトラブルがなくなり、円滑に実施できるようになった。発言や行動にも、思いやりが見られるようになり、小さな学校ならではの一体感が生まれた。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

全校的な取組となってから2年目を迎え、計画段階から教育相談特別支援委員会が中心となって、関係者間で連携して取り組むことができた。

2 課題

キャリア教育に重点を置いている2学年では、年間計画に新たにカウンセリング等を位置付ける時間の余裕はないため、キャリア教育の目標である人間関係形成・社会形成能力の育成の観点から、各教科や進路指導部等と目標を共有し、指導を重点化する必要がある。

3 次年度に向けて

今年度実施した取組の評価を踏まえ、生徒の発達段階に応じたより効果的なプログラムになるよう改善する。キャリア教育や道德教育とのつながりを明確にするとともに、総合的な学習の時間又は総合的な探究の時間や特別活動の時間等を活用して、全ての生徒を視野に入れた学校全体の取組として組織的に取り組む。

学校行事等の教育活動において、地域との連携により多くの生徒が活躍できる場面を設定し、成功体験を積み重ねることで、リーダーシップのみならずフォロワーシップを育成する。

北海道砂川高等学校

課程：全日制
 学科：普通科
 生徒数：292名

本校の目指す生徒像

- (1) 自ら考える力と学ぶ意欲を身につけ、自己実現を目指す人
- (2) 倫理観、公共心や思いやりの心を培い、地域に貢献しうる人
- (3) 自ら鍛える心をもち、強健で気力ある人

本校の現状

- ・素直で人に対して優しい気持ちを持っている生徒が多い。
- ・一方で、基礎学力が定着していない生徒や人間関係が希薄で、コミュニケーション能力に欠ける生徒もみられる。

本校の取組の特徴

- ・スクールカウンセラーによる予防的・開発的教育相談を実施し、生徒の心の健康に係る問題の早期解決を図る。
- ・教員研修(人間関係づくり、自殺予防教育等)を通して、生徒の自己肯定感を高める支援について共通理解を深める。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月13日	宿泊研修におけるグループエンカウンターの実施	○	○		1年次
9月18日	自殺予防プログラム「C②将来に目を向ける」			○	2年次
9月25日	スクールカウンセラー講話「困っている人の相談に乗る」		○	○	1年次
10月1日	スクールカウンセラー講話「困っている人の相談に乗る」		○	○	2年次
10月26日	保健講話「デートDV」	○		○	1年次
1月18日	スクールカウンセラー講話「ゲートキーパーになろう」		○	○	3年次
3月11日	自殺予防プログラム「C④失敗を見つめ直す」			○	2年次
3月14日	自殺予防プログラム「A①相談しやすい人間関係」	○			1年次
3月19日	自殺予防プログラム「A③相談しやすい会話の仕方」	○			1年次
4・5・9・1月	担任・副担による教育相談の実施			○	全年次
8・2月	「ほっとプラス」の実施				2年次
12・1月	「ほっとプラス」の実施				3年次
1・3月	「ほっと」の実施				1・2年次
通年	スクールカウンセラーによる個別面談(年間14回)	○	○	○	全年次

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

(1) グループエンカウンター「アイスブレイク」

- ①ねらい
 - ・好ましい人間関係を構成するための一助とする。
 - ・他者を思いやる心や互いに協力する姿勢を育てる。

②対象 1年次

③内容 バトンの受け渡し、自己紹介、人間知恵の輪、ジェスチャーコミュニケーション



- ④成果
- ・ジェスチャーコミュニケーションなどを取り入れたことで、打ち解けやすい雰囲気をつくることができた。
 - ・集団の中で互いに協力する姿勢や絆が生まれたことにより、一人ひとりが自分の居場所を実感でき、安心感を持つことができた。

(2) 保健講話「デートDV」

- ①ねらい 互いに相手を思いやり、自分の人権も相手の人権も大切にす男女交際の在り方について考える。
- ②対象 1年次
- ③内容 DVDの視聴後、どのような行為が「デートDV」に該当するのか考える。
- ④成果 思いや考えがすれ違った時に、相手が悪いという一方的な決めつけをするのではなく、相手を思いやる気持ちをもつて互いの人権を尊重することが、良好な人間関係を築くために大切であることが理解できた。



2 自殺予防教育の取組

(1) スクールカウンセラー講話

- ①ねらい 心の危機サインの出し方や受け取り方を学び、心身が不調の時の周りの人との関わり方を考える。
- ②対象 全年次
- ③内容
- ・テーマは、1・2年次が「困っている人の相談に乗る」、3年次が「ゲートキーパーになろう」。
 - ・「依存症」(アルコール・スマホ・ゲーム・薬物・ギャンブル)について解説するとともに、身近な人や自分に起こった状況を想像させて、問題の深刻さを捉えさせる。
 - ・DVDの視聴やワークシートでの学習を通して、相談の仕方や受け方について学ばせる。
- ④成果
- ・依存症になった人が抱えている悩みを自分のことに置き換えて考えさせることにより、他人事と捉えていた「依存症」の深刻さを実感することができた。
 - ・「自分の役割を果たしたい」「誰かに必要とされたい」という人間の持っている欲求と向き合うきっかけになり、その後のアンケートによる相談やカウンセリングにも結び付いた。



3 スクールカウンセラーによる支援

(1) 個別カウンセリング(年間14回実施、対象:希望者)

- 生徒11名(延べ19名)と教諭3名がカウンセリングを受け、抱えている悩みや不安の解消や緩和につなげることができた。
- スクールカウンセラーによる専門的な立場からの助言や提案を踏まえ、個々の生徒の状況について教員間で情報共有したことにより、生徒や保護者への適切な対応に結び付けることができた。

(2) いじめ対策防止委員会

- いじめに対する適切な対応方法についてコンサルテーションによる協議をしたことで、教職員が当該生徒へのコーチングの方法を身に付けることができ、問題が長期化する前に円滑な解決へと導くことができた。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果

○ 「ほっと」による検証

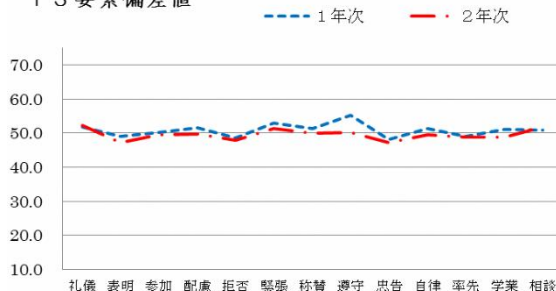
ア 13要素偏差値

- ・1年次、2年次とも「礼儀」が高いことから、挨拶の大切さや他人への感謝の気持ちをもっていることが分かる。一方、「拒否」「忠告」が低いことから、他者からの要求に対する対応に課題がある。また、1年次、「緊張」「遵守」「自律」が高いことについては、ピアサポートによる指導の効果が表れたものと思われる。
- ・2年次は「表明」が低く、自己の意見や主張を上手くできないことが課題であるが、「相談」が高いので、面談しやすい環境を整えながら心のケアを進めることが重要である。

イ 4因子得点

- ・1年次、2年次とも、「関係維持」は男子が低く、女子が高い。逆に、「仲間強化」は男子が高く、女子が低い。これらのことから、女子に対しては友人間の距離の取り方に着目して、見守る必要がある。

1 3要素偏差値



4因子 得点	1年次			2年次		
	男子	女子	平均	男子	女子	平均
関係維持	69.3	80.5	75.0	71.4	73.3	72.6
仲間強化	57.1	56.7	56.9	55.7	53.0	54.0
自己統制	66.8	71.2	69.0	57.5	64.9	62.2
援助要請	57.4	62.8	60.1	60.1	62.5	61.6

礼儀 表明 参加 配慮 拒否 緊張 称賛 遵守 忠告 自律 率先 学業 相談

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

- 不登校生徒数は1名、中途退学者数は7名で、昨年度より減少している。
- 認知したいじめ2件は、早期発見・早期対応により解消し、解消率は100%である。

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

- 自分を「肯定」しようとする気持ちをもてる生徒が増えた。
- 人の痛みを考え、その人の立場になって行動することが大切と考える生徒が増えた。
- 他人とのつながりやコミュニケーションの必要性を感じ、積極的に学校行事に参加する生徒が増えた。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

- 担当教員が中心となり、本校生徒に必要な取組を選択して実施することができた。

2 課題

- スクールカウンセラーとの連携が不十分で、生徒が主体的に取り組む場面が少なかったことから、連携体制を強化する必要がある。
- 「ほっと」「ほっとプラス」の分析結果を情報共有し、活用していく体制が不十分であったことから、校内研修を充実させる必要がある。

3 次年度に向けて

- スクールカウンセラーとの連携を密にし、生徒が主体的に学べる講話や活動を企画・運営する。
- 教職員に客観的な生徒理解の重要性を周知するとともに、校内研修を充実させ、明確になった課題を取組の改善につなげる方策を検討するなど、生徒への計画的・継続的な支援ができる体制を整備する。

北海道札幌北高等学校

課程：定時制
 学科：普通科
 生徒数：149名

本校の目指す生徒像

- ・自分の良さを伸ばせる生徒
- ・規律意識や思いやりのある生徒
- ・ひたむきに努力できる生徒

本校の現状

生徒のコミュニケーション能力と社会性の育成、心の健康教育の充実に向けた校内環境の整備、特別支援教育に関する教職員のスキルアップが課題である。

本校の取組の特徴

- 1 スクールカウンセラーを活用した生徒のコミュニケーション能力と社会性の育成
- 2 スクールカウンセラーを活用した教職員のスキルアップ

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月13日	カウンセラーによる新入生を対象とした講話			○	1年
4月27日	自殺予防教育プログラム① カウンセラーによる講話「望ましい人間関係の確立について」（「援助希求的態度の育成、早期の問題認識」）	○	○	○	全学年
5月～2月	カウンセラーによる個別のカウンセリング	○	○	○	全学年
5月～	自殺予防教育プログラム② 心身の発達と心の健康（保健体育「ストレス対処能力、及び、援助希求的態度の育成」）	○	○	○	1, 2学年
7月4日	アセスメント「Q-Uテスト」の実施	○	○	○	全学年
7月11日	子ども理解支援ツール「ほっと」の実施	○	○	○	全学年
7月20日	自殺予防教育プログラム③-1 カウンセラーとの情報交換「生徒と教師が共にコミュニケーション能力を高めるために」（「早期の問題認識、援助希求的態度の育成」）				
7月20日	自殺予防教育プログラム③-2 「生徒と教師が共にコミュニケーション能力を高めるために」講座（「早期の問題認識、援助希求的態度の育成」）	○	○	○	全学年
8月29日	自殺予防教育プログラム④ ソーシャルスキルトレーニング（「援助希求的態度の育成」）			○	全学年
12月	グループ学習②（授業における言語活動の実施）		○		全学年
1月23日	自殺予防教育プログラム⑤ ブレインストーミング（「ストレス対処能力、及び、援助希求的態度の育成」）			○	全学年
3月14日	自殺予防教育プログラム⑥ カウンセラーによる事例研修（「心の教育」）				
3月中	学校プログラムの作成				

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

7月20日にコミュニケーションスキル講座としてキャリアガイダンスを含め、生徒のコミュニケーションスキル向上のための講座を実施した。

2 自殺予防教育の取組

- (1) カウンセラーによる講話「望ましい人間関係の確立について」
- (2) 心身の発達と心の健康（保健体育「ストレス対処能力、及び、援助希求的態度の育成」）
- (3) カウンセラーによる講座「生徒と教師が共にコミュニケーション能力を高めるために」
- (4) ソーシャルスキルトレーニング「援助希求的態度の育成」
- (5) ブレーンストーミング「ストレス対処能力、及び、援助希求的態度の育成」
- (6) カウンセラーによる事例研修会「心の教育」

3 スクールカウンセラーによる支援

- 4月13日 カウンセラーによる新入生を対象とした講話
4月27日 カウンセラーによる講話「望ましい人間関係の確立について」
5月～2月 カウンセラーによる個別のカウンセリング
7月20日 カウンセラーとの情報交換
「生徒と教師が共にコミュニケーション能力を高めるために」
3月14日 カウンセラーによる事例研修（「心の教育」）



次年度に向けて

1 成果の検証

- (1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

生徒本人の自己分析の結果に教員から見た生徒像を重ね合わせることが、「ほっと」を効果的に活用する上で重要なポイントであり、生徒一人一人の特徴を把握することがよりその後の取組に有益な情報となることが考えられる。

- (2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

中途退学者は、年々減少傾向にあり、今年度も引き続き安定している。特に1学年での退学者の減少が顕著である。不登校生徒数は1学年が減少に転じたことに加え、2学年以降は今年度も大きく減少した。来年度は更なる減少を目指して取り組みたい。

- (3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

全職員が共通理解のもと、生徒指導や教育相談を充実したことにより、生徒は落ち着いた学校生活を送っている。（いじめの未然防止、自殺予防教育の成果）

- (4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

長期休業前に個々の生徒について、ホームルーム担任及び学年の教科担任から特別な配慮が必要な生徒の情報を詳細に報告し、全職員で情報を共有した。

2 課題

- 対話的な授業による授業改善と生徒の基礎学力向上を図る必要がある。
- 教職員の特別支援教育への理解と合理的配慮の実践を行う必要がある。
- 特別支援教育に関する校内研修の計画的な実施と外部の研修への参加促進及び成果の共有を図る必要がある。

3 次年度に向けて

次年度も入学時の予防教育に重点を置き、1学年を中心に「ほっと」の活用を図り、分析後の担任による面談及び教員間の情報の共有等に生かしていきたい。

北海道札幌東豊高等学校

課程：全日制
 学科：普通科
 生徒数：791名

本校の目指す生徒像

- 1 向上心をもち、努力を継続できる生徒
- 2 自ら考え、主体的に行動できる生徒
- 3 心身共に健康な生徒

本校の現状

自己有用感の低い生徒や学校生活に意欲をもてない生徒、良好な人間関係を築けない生徒がみられる。

→中途退学をする生徒が比較的多い傾向にある。

本校の取組の特徴

- ・心理検査（TK式M2-DV）の結果分析や「ほっと」による集団分析を行い、生徒の個別指導や集団形成に役立てる。
- ・スクールカウンセラーを活用し教育相談の手法を学び、生徒理解の機会を増やし、相談内容を充実させクラス経営や集団形成に役立てる。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
通年	教員・生徒による登校時の挨拶運動		○		全学年
通年（月1回）	スクールカウンセラーによる特別カウンセリング				全学年
4月12日	心理検査（TK式M2-DV）実施				1学年
4月27日	いのちの大切さを考える集会①（交通安全講話）			○	全学年
4月29日	町内清掃ボランティア	○	○		全学年
6月5日	自殺予防プログラムの実施（相談しやすい人間関係構築に向けたコミュニケーショントレーニング）	○	○	○	1学年
6月5日	心理検査（TK式M2-DV）結果の分析と活用				1学年
6月12日	「ほっと」実施				1学年
6月19日	いのちの大切さを考える集会②（生と性に関する講演会：早期の問題認識に向けて）			○	1学年
7月11日	交通安全街頭啓発ボランティア	○	○		全学年
7月26日 7月27日 8月2日	地区子ども夏祭りボランティア	○	○		全学年
8月23日	自殺予防啓発活動（教育相談通信発行）			○	全学年
9月21日	交通安全街頭啓発ボランティア	○	○		全学年
11月12日	留学生との異文化交流実施		○		全学年
12月3日	地域住民との異世代交流実施	○	○		全学年
2月14日	集団カウンセリング実施（宿泊研修）	○	○		1学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

(1) 挨拶運動の実施

【活動のねらい】

挨拶を通して、生徒同士や教員とのコミュニケーションが円滑になるようにする。

【活動の概要】

毎朝、校長をはじめとする教職員、生徒会執行部などの生徒代表が校門前や生徒玄関等に並び、朝の挨拶運動を実施している。登校してくる生徒に「おはようございます」と声かけをしている。

【取組の成果】

- ・声かけすることで、素直に挨拶できる生徒が増えており、校内の明るい雰囲気醸成につながっている。
- ・挨拶を通じてコミュニケーションを図ることの大切さに気付かせることができた。

(2) ボランティア活動等を通じた地域との連携、異世代、異文化交流

【活動のねらい】

- ・異世代、異文化の人との交流を通して、コミュニケーション能力の育成を図るとともに、自己肯定感等をもたせる。
- ・地域の人と連携を図ることで、学校に対する評価を改善させるとともに、地域全体で生徒を育てる雰囲気づくりを行う。

【活動の概要】

ア 年2回の交通安全街頭啓発活動に生徒が参加した。学校近くの国道に立ち町内会の人と交流を図りながら、交通安全の旗を振り、ドライバーに交通安全を呼びかけた。

○参加生徒数

- ・夏の交通安全運動 25名
- ・秋の交通安全運動 26名



イ 春の町内清掃にボランティアを募り有志が参加した。町内会の方と交流を図りながら町内の清掃活動を実施した。

○参加生徒数：41名

ウ 近隣地区の子ども夏祭り等のボランティアに参加した。子どもたちと交流を図りながら、イベント運営を担当した。

○参加生徒数

- ・てっちい夏まつり 11名
- ・ひのまるちびっ子夏祭り 14名
- ・ちあふる・ひがし学生ボランティア 4名



エ モエレ地域で毎年8月に行われるイベント、「燃えれ！わが街2018」に茶道部の生徒がボランティアとして参加した。野点を行い地域住民と交流した。

○参加生徒数：5名



オ 11月に、北海道H S L日本語学校のネパールからの留学生と本校書道部生徒との交流会を実施した。本校からは、日本の伝統文化である「書」について、パフォーマンスの披露と生徒がアドバイスしながらの書道体験を実施した。留学生からは、ネパールの紹介と民族舞踊の披露があった。短い時間だったが、生徒は積極的に留学生と関わり、充実した交流だった。

○参加生徒数：4名



【活動の成果】

- ・ 普段接する機会の少ないお年寄りや子どもたち、外国の方といった、異世代、異文化の人とコミュニケーションを図ることで、他者を受け入れ理解しようとする心や、好ましい人間関係を構築しようとする姿勢が育成された。
- ・ ボランティア活動を通して感謝の言葉をもらうことで、自己肯定感や自己有用感を高めることができ、積極性の向上につながった。

(3) 宿泊研修での集団カウンセリングの実施

【活動のねらい】

好ましい人間関係を構築するための一助とする。

【活動の概要】

1学年の宿泊研修において、国立大雪青少年交流の家職員の指導によるコミュニケーションプログラムやクラス対抗綱引き大会などの行事を実施した。適切な人間関係の在り方を意識させた学年・学級づくりに活用した。

(4) 「ほっと」や「心理検査（TK式M2-DV）」の実施と結果の活用

【活動のねらい】

生徒個々や集団分析をするための客観的資料とする。

【活動の概要】

1学年生徒全員に「ほっと」及び「心理検査」を実施した。その結果について、スクールカウンセラーの助言を受けて分析を行い、教員全員で共有することで、生徒理解に活用した。

【活動の成果】

- ・ 生徒個々の内面の状況を客観的に知る一助となった。
- ・ 分析結果を全教員で共有することで、きめ細かな生徒支援につなげることができた。

2 自殺予防教育の取組

○ いのちの大切さを考える集会を実施。

【活動のねらい】

いのちの尊さを知り、自殺予防に関する知識を身に付け、行動する意識をもたせる。

【活動の概要】

交通安全講話と生と性に関する講演会で、いのちの大切さ、自分や他者を尊重する気持ち、残された家族の気持ち等を意識させる内容を加え、自殺予防に取り組んだ。

【活動の成果】

自殺の悲惨さを理解させ、悩んだときにどう行動すべきかを考える機会となった。



カウンセリング通信



3 スクールカウンセラーによる支援

【活動のねらい】

生徒個々の状況を適切に把握し、きめ細かな支援につなげる。

【活動の概要】

スクールカウンセラーを活用し、月に1回、特別カウンセリングを実施した。終了後には、教育相談担当教員、養護教諭、担任等とカウンセラーによるコンサルテーションを行い、生徒理解の深化と支援に努めた。また、教育相談担当教員を中心に、カウンセラーから教育相談の手法に関わる研修を受け、教育相談体制を確立し、きめ細かな支援につなげた。

<カウンセリングルーム相談数>

月	数	月	数	月	数
4	16	8	3	12	4
5	17	9	4	1	4
6	16	10	13	2	
7	11	11	6	3	

<特別カウンセリング相談数>

月	数	月	数	月	数
4	生徒4、教員1	8	生徒5	12	生徒2、教員2
5	生徒4	9	生徒5	1	生徒3、教員2
6	生徒5、保護者1	10	生徒5	2	
7	生徒4、教員1	11	生徒4、教員1	3	

【活動の成果】

- ・様々な問題を抱える生徒の理解を深めることができた。
- ・関係教員間で情報共有することで、きめ細かな支援が行えるようになった。

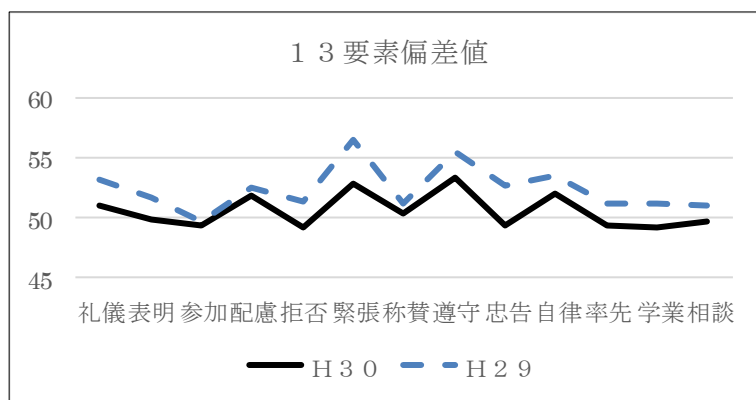
次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足感、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

ア 「ほっと」を1学年全員に対して実施した。その結果について、分析を行い、全教員で共有するとともに、個人面談の資料とするなど、生徒理解に活用した。

◎分析結果より



4 因子得点

4 因子	学年平均	
	H29	H30
関係維持	75.5	74.8
仲間強化	63.3	59.0
自己抑制	71.8	69.5
援助要請	62.5	59.7

- ① 要素についてみると、学年集団として特に大きく偏差値50を下回る項目はなく、ほぼ平均的であるが、昨年度と比較すると、全ての項目で下がっている。
- ② 4因子についてみると、集団としては「仲間強化」と「援助要請」が低い傾向にあることがうかがえる。また、13要素同様、昨年度と比較すると、全ての項目で下回っている。
- ③ 集団でみると平均的であるが、個々の傾向を見ると、様々な支援が必要な生徒が一定程度在籍し、年々増加傾向にあることが分かる。

イ 「心理検査（TK式M2-DV）テストバッテリーM2+」を1学年全員に対して実施し、その結果について、スクールカウンセラーの助言を受け分析を行い、教員全員で共有することで生徒理解に活用した。

◎分析結果より

① 昨年の1学年と比較して、増加傾向にある項目

「家庭不適應」28/280 (10.0%)

「対人不適應」18/280 (6.4%)

「自己不適應」25/280 (8.9%)

「思慮欠如」35/280 (12.5%)

「行動面社会基準逸脱傾向」24/280 (8.6%)

② 昨年の1学年と比較して、減少傾向にある項目

「学校不適應」42/280 (15.0%)

「虚栄浪費傾向」37/280 (13.2%)

③ 昨年の1学年と差異のない項目

「抑制欠如」22/280 (7.9%)

「認識面社会基準逸脱傾向」16/280 (5.7%)

全体を通して、昨年と大きな変化はないが、様々な支援が必要な生徒が一定程度いることが分かる。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

ア 中途退学者数については、1年生で倍増している。不本意入学であるという気持ちから抜け出せず、本校で意欲をもって学校生活を送ることができない生徒が多いたことが、要因の1つと思われる。不登校の生徒はほとんどいない。

イ いじめの認知件数は減っているが、複雑な人間関係に起因するものが多く、単純に解決しなくなっている傾向にある。

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

ア ボランティア活動に積極的に参加する生徒が増加しており、そのことで自己有用感が育成され、自ら外部のボランティア団体に所属し活動するなど、自信をもって様々な活動を行う生徒が増えている。

イ 特別カウンセリングを通じて、自己の内面と向き合い、前向きに人間関係を捉えようとする生徒が増えてきている。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

ア スクールカウンセラーとの情報交換や研修を有効に活用し、生徒個々の理解深化と支援に努めている。

イ アセスメントの結果を活用し、生徒面談等に役立てている。

2 課題

(1) 「ほっと」等、複数の検査を活用し、より客観的、多角的に生徒個々及び集団を捉え、個別の支援計画や指導計画の作成を充実させる必要がある。

(2) より多くの生徒に自己肯定感や自己有用感をもたせられるよう、地域での様々な活動を、生徒主体で生徒全体の取組となるよう、より一層進めていく必要がある。

3 次年度に向けて

(1) 各種検査を適切な時期に実施し、その結果やカウンセリングをもとに、生徒個々のきめ細かな理解をさらに深め、支援の必要な生徒には個別の支援計画を作成し、支援する。

(2) 生徒主体による地域での活動を、より全体に推し進めるよう計画する。

北海道札幌あすかぜ高等学校

課程：全日制
 学科：普通科
 生徒数：893名

本校の目指す生徒像

- ・高い知性と豊かな情操を兼ね備える人
- ・個性溢れ人間性に富む人
- ・公德心を身につけた行動の取れる人

本校の現状

主体的な学びの基礎となる人間関係構築のためには、自己と他者の違いを理解した上で「爽やかに自分の考えを主張するスキル」が必要である。

本校の取組の特徴

構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングを通して、自己理解・他者理解を深め、自己を理解するとともに他者との間で思いやり、助け合い、支え合う人間関係を育み、人間関係形成能力を高める。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月18日	宿泊研修で構成的グループエンカウンターの実施（場所：日高少年自然の家、講師：日高少年自然の家職員）	○	○		第1学年
5月28日	町内ボランティア清掃	○	○		全学年
6月4日	「Q-U」の実施				全学年
6月15日	自殺予防教育（心の健康・薬物に関する講演会）			○	全学年
7月2日	特別講演会（諦めないことの大切さ）	○			全学年
7月14日	星置運河清掃ボランティア	○	○		全学年
7月17日	「ほっとプラス」の実施				第1学年
10月23日・30日	スクールカウンセラーによるスキルアップトレーニング	○	○	○	第1学年
10月31日	自殺予防教育（心の健康）	○	○	○	第1学年
11月6日・20日	スクールカウンセラーによるスキルアップトレーニング	○	○	○	第1学年
11月7日	自殺予防プログラムの実施（ストレス対処能力の育成）	○	○	○	第1学年
11月14日	特別講演会（好きなことを仕事にするために必要なこと）	○			全学年
11月15日	性に関する講演会	○		○	第1学年
12月12日	自殺予防プログラムの実施（ストレス対処能力の育成）	○	○	○	第1学年
2月13日	「ほっとプラス」の実施				第1学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

○「性に関する講演会」

- (1) ねらい 性に関する正しい知識と、生命の大切さや豊かな人間関係の構築について考える。
- (2) 対象 1学年生徒（8クラス 285名）
- (3) 内容 「札幌相談専門助産院あさ」よし ゆうこ氏を招き「人生をデザインしよう！生命と性・カラダとココロ ナビ」と題して講演をしていただいた。
- (4) 成果等 生まれてくる「生」について、男女の「性」について、対等な関係を築くために必要なこと、愛について講演いただいた。他者との間で思いやり、助け合い、支え合う人間関係のベースとなることが期待される。



2 自殺予防教育の取組

○「自殺予防教育プログラム」

- (1) ねらい 「早期の問題認識(心の健康)」、「援助希求的態度の育成」を図る自殺予防教育により、命を大切に作る心を育てる。
- (2) 対象 1学年生徒（8クラス 285名）
- (3) 内容 「自殺予防教育プログラム」を活用し、1学年生徒を前半クラス、後半クラスの2つに分け体育館で2時間×2回実施した。講師役の教諭が、パワーポイントを用いて説明した後、9名程のグループを作り、講師の話聞いて気付いたことや考えたことを互いに発表した。
- (4) 成果等 「いのちの危機」について考えることで、問題を抱えたり危機に陥ったりしたとき、一人で背負い込まず、自分自身や友達の危機に気付き、対処したり関わったりすることが大切だということについて、グループ内で自分の意見を発表することにより、考えを深めることができた。



3 スクールカウンセラーによる支援

○「スキルアップトレーニング」

- (1) ねらい 構成的グループエンカウンターやピアサポートの手法を用いて、自己理解・他者理解を深めることにより、よりよい人間関係の構築に役立てる。
- (2) 対象 1学年生徒（8クラス 285名）
- (3) 内容 宿泊研修で行った非言語的コミュニケーションの研修を下地として、2クラス合同で2時間×2回実施した。9名から11名のグループを8つ作り、スクールカウンセラーの指示のもと、1グループにファシリテーター役の教員が1名入り、自己紹介や他己紹介、天使の聞き手・悪魔の聞き手を実践した。
- (4) 成果等 グループ内でのシェアリングを行うことにより、自分と同じ意見をもっている生徒が多くいることに驚き、より積極的に他者と関わっていかうとする姿勢が見られた。さらに、聞く姿勢を変え傾聴することで相手との友好関係が構築されることも学んだ。

次年度に向けて

1 成果の検証

- (1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）
どのクラスも、学校生活意欲総合点は総じて高かった。学級内のルールづくりや活躍できる場面や認められる機会を取り入れることで、承認感を高めていくことが求められる。
- (2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率
宿泊研修で構成的グループエンカウンターを導入した平成27年度以降、1学年前期の転・退学者は減少傾向にある。昨年度6名いた1学年での転・退学者は、5名とほぼ横ばいである。
- (3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容
宿泊研修での構成的グループエンカウンターとスクールカウンセラーによるスキルアップトレーニングによって、「よりよい話し方・聴き方への興味」「自分と違う考えをもつ他者への関心」が高まっている。外部講師による講演会の場面などで、反応を返しながらかくことができるようになってきている。
- (4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況
生徒理解を深めるとともに、生徒が、他者と助け合い、支え合う人間関係を育むため、教員は、積極的に本プログラムに関わるとともに、スクールカウンセラーとの連携を深めている。

2 課題

- (1) 主体的な学びの基礎となる人間関係の構築のためには、今年度第1学年で実施した「助け合い、支え合う人間関係づくり」を土台として、自己と他者の違いを理解した上で「爽やかに自分の考えを主張できるスキル」が必要である。
- (2) 取組の効果を測定し、次年度の計画改善に役立てることが重要である。「ほっとプラス」の結果を検証し、生徒の変容を定量的に捉える必要がある。
- (3) キャリア形成に必要な自律能力に課題を抱える生徒が多い実態を踏まえ、自己理解を深め、自分の目標に向けて自身の行動をコントロールする術をトレーニングする必要がある。

3 次年度に向けて

近年、友人関係・家族関係などの身近な人間関係に課題を抱え、精神的・身体的に不安定な状態のまま、学校生活で十分に力を発揮できない生徒が増えてきている。スクールカウンセラーのカウンセリングを利用する生徒も多く、より一層スクールカウンセラーと連携・協力して有効な支援・対策を学校全体で継続的に行っていく。

これまで同様、助け合い、支え合う人間関係づくりを様々な方策で支援するとともに、アセスメントの結果を活用し、自己理解及び人間関係づくり等生徒のキャリア形成に役立つ取組を実践していく。

また、第2学年以降にアサーショントレーニングを導入し、生徒のコミュニケーション能力の向上を図るための研究を推進する。

北海道江別高等学校

課程：全日制

学科：普通科・事務情報科・生活デザイン科

生徒数：886名

本校の目指す生徒像

自他を尊重し人間力を高め、課題解決に向けた行動力と創造力を培う。

本校の現状

中途退学者数、不登校生徒数ともに減少傾向である。対人関係においては、周囲に配慮するあまり、自己開示することに消極的な生徒もみられる。

本校の取組の特徴

SCが講師のピアサポート研修会に、保健局員を中心とした生徒が定期的に継続して参加し、他者理解や人間関係形成能力を養っている。また1学年には、SCや外部機関の専門家を講師にした保健講話を実施し、心理的支援や生命の尊厳への理解を深める特別な授業を行っている。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月～9月	SCによる個別面談	○		○	第2・3学年
6月1日	hyper-QUテスト				第1学年
6月13日	保健講話「高校生のためのメンタルヘルス」			○	第1学年
9月～12月	ピアサポート研修会（全7回）	○	○	○	第1～3学年
10月～3月	SCによる個別面談	○		○	第1～3学年
12月～1月	自殺予防教育プログラム「望ましい人間関係の確立」	○	○	○	第1学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

○保健講話「高校生のためのメンタルヘルス」

- (1) ねらい：新しい環境に緊張と不安を抱えがちな新入生が、青年期の心の在り方、ストレスマネジメント、コミュニケーションスキル及びソーシャルスキル等について学ぶ。
- (2) 対象：第1学年全クラス282名
- (3) 内容：思春期特有の心理的特徴を知り、悩みについてSNSの文字ではなく音声としての言葉で伝えることを学んだ。
- (4) 成果：心身ともに急激に変化する思春期・青年期を生きる自己について考える契機となった。

2 自殺予防教育の取組

- (1) ねらい：自己表現力やコミュニケーション能力を高める体験的な活動を通して、互いに相談できるような人間関係を確立する。
- (2) 対象：第1学年E組生徒38名
- (3) 内容：相談する際の期待感と抵抗感を理解し、相談しやすい方法について考えた。
- (4) 成果：ロールプレイや体験発表を取り入れ、自己表現力やコミュニケーション能力を高め、悩みや不安を相談できるような望ましい人間関係を確立していく態度や能力を身に付けた。

3 スクールカウンセラーによる支援

困難を抱えている生徒へのより効果的な支援方法について検討を重ねた。複雑化する家庭環境や、精神不安による希死念慮の高まり等について、保護者や関係機関とも連携し、当該生徒が健全に登校し学習することを最優先に支援に関わった。また、ピアサポート研修会においては、講師として、コミュニケーション能力の育成や人間関係の確立の在り方について御指導いただいた。研修会に参加した生徒は、トラスト・ウォークで目の不自由な人の気持ちを体験したり、ロールプレイによって傾聴することを体験したり、アンガーマネジメントとして怒りを感じたときの対処法などを学んだりした。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

6月に、第1学年全クラス（282名）に対してhyper-QUテストを実施した。学校生活意欲尺度に関しては、友人・教師・学級いずれとの関係も全国平均ポイントを上回り、学習・進路においても共に全国平均よりも意識が高いことが読みとれた。しかしながら、教師・学級との関係が友人との関係よりも下回っていることから、友人との関係を重視するあまり、学校や教師に対して悩みや不安を打ち明けることに躊躇する傾向が強まらないような信頼関係の構築が重要だと考える。

また、学級生活不満足群は9%で全国平均27%よりは低い傾向にあるが、何らかの支援を要することも考えられることから、今後も注意深く学校生活及び家庭環境の変化等を見守っていく必要があると考えられる。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

- ・ 不登校生徒数（平成29年度は3人→平成30年度は1人）
- ・ 中途退学者数（平成29年度は4人→平成30年度は2人）
- ・ いじめ認知数（平成29年度は3人→平成30年度は0人）

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

ピアサポート研修会に参加した生徒を中心に、コミュニケーションスキルの向上が見られた。積極的に他者の気持ちを想像し、理解を深め、自他を尊重する内的な変化を認識している様子が見える。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

心理学に興味のある生徒や進路確定後の3学年について、ピアサポート研修会への参加を促すなど、校内における理解や認知は深まっている。

2 課題

ピアサポート研修会について、全校生徒を対象とした取り組みまでには至っていない。要因としては、既存のさまざまな活動との場所や時間の兼ね合いのほか、SCの勤務時間の確保が困難と考えられることから、実施方法について検討していく必要がある。

また、本校生徒の特徴として自己の悩みや困難に対する自覚の希薄さが見受けられることから、自分自身を見つめ、適切に自己開示できる能力や他者理解を高めるための継続的な援助が今後も必要だと考えられる。

3 次年度に向けて

ピアサポート研修会を定期的に受講した生徒がピアサポーターとなって、それまでに養った人間関係形成能力や他者理解力をさらに深め、学級や学年等の単位で継続的に展開していくことを検討する。

ピアサポート研修会（平成30年度：トラスト・ウォークの様子）



北海道有朋高等学校

課程：定時制
 学科：普通科・事務情報
 生徒数：227名

本校の目指す生徒像

- ・自ら伸ばせ輝かせ
- ・心豊かに気品あれ
- ・進取で強くしなやかに

本校の現状

様々な要因により多くの困難を経験している生徒がみられる。心のケアを通じて生徒一人ひとりに自主自律の精神が培えるように取り組んでいる。

本校の取組の特徴

- ・スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実
- ・地域と連携したボランティア活動による、生徒の自尊感情や自己肯定感の育成

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月25日～27日	学校付近の交差点にて、交通安全指導等		○		全年次
5月1日～31日	カウンセリング月間の設定			○	全年次
5月16日	自殺予防教育プログラムを利用したホームルームの実施			○	全年次
5月22日	地域の花壇造成	○	○		全年次
6月26日	拓寿園（高齢者福祉施設）で交流会	○	○		全年次
8月2日	拓寿園（高齢者福祉施設）夏祭りのお手伝い		○		全年次
10月17日	学校周辺の校外地域清掃	○	○		全年次
1月26日	屯珍館（地域児童会館）でアイスクャンドル作成		○		全年次

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

年度当初に計画していた、道医療大学生とのピア・サポートの実施ができなかったが、ボランティア活動に参加した生徒は、「楽しかった」「疲れたけど、参加してよかった」と多くの人と接して自己有用感と達成感を高揚させ、人と関わることの大切さを実感するとともに、コミュニケーションスキルを向上させることができた。

2 自殺予防教育の取組

自殺予防教育プログラムを活用し、ホームルーム等で「自他の命の大切さ」を考えた。

3 スクールカウンセラーによる支援

スクールカウンセラーによる面談の様子から多角的な支援の方法を検討したり、地域と連携したボランティア活動を通して得られた評価によって生徒が自尊感情や自己肯定感を感じられるような取組の充実を今後を図った。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

本校では、自分の進路や目的に合わせて科目を履修しており、ホームルーム等の特別活動を除くとクラス単位で活動する機会がない。そのため、学級で日常の学校生活を送ることが少なく、生徒一人一人が恣意的な人間関係を構築・維持するなかで、コミュニケーション能力等の向上を図っている。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

平成29年度と比較し、平成30年度は不登校生徒数が約4割、中途退学者数が約3割減少し、本事業におけるスクールカウンセラーによる個別カウンセリングや、地域と連携したボランティア活動等の取組の成果が表れてきている。

いじめについては、アンケートや面談を実施する中では、認知していない。

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

大学生によるピア・サポートについて、昨年度に引き続き、大学の授業の関係で、日程調整がうまくいかず、実現できなかったが、地域ボランティア等を通して、生徒が他者と接する機会が多くなったことにより、コミュニケーションスキルは向上したと考えられる。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

生徒についてのスクールカウンセラーと教員間の円滑な情報共有とその後の適切な対応により、大事に至らなかった案件もあることから、スクールカウンセラーと教員との連携の重要性を再認識した。

2 課題

(1) 不登校傾向のある生徒の保護者や対人関係を構築できない生徒など、多様な問題を抱えた生徒及び保護者からのスクールカウンセラーへの相談希望が多くあるが、その分、限られた時間の中での相談となっていることから、時間の確保を含めた相談体制の充実を図る必要がある。

(2) コミュニケーションスキルの向上を目指したピア・サポートの実施について、昨年度に引き続き、実現できなかったことから、次年度は、早い時期から連携大学と実施日程等の調整を行う必要がある。

3 次年度に向けて

(1) スクールカウンセラーと連携を図り、生徒が安心して登校できるような校内環境の構築を、今後も推進する必要があることから、スクールカウンセラーの来校回数や面談時間を十分確保できるように、カウンセラーの時間配分の増加について要望を続けることで、1人でも多くの生徒がカウンセラーと面談ができるための時間を確保する。

(2) コミュニケーションスキルの向上のため、2年間実施できなかった道医療大学の学生と連携したピア・サポートの取組が実現できるよう、調整を図る。

北海道岩内高等学校

課程：全日制
 学科：普通・事務情報
 生徒数：344名

本校の目指す生徒像

- ・伝統や校風を重んじ、知徳体のバランスの取れた生徒
- ・学ぶ意欲と確かな学力をもち、たくましく生きる力を身に付けた生徒
- ・生涯を健康に過ごすために自らなすべきことを理解して努力できる生徒

本校の現状

- ・学校不適応が背景にあると考えられる転学者や退学者が増加傾向にある。
- ・コミュニケーションスキルが未熟であるため、人間関係の構築が苦手な生徒が増加傾向にある。
- ・ストレス等を抱え、対応や発散の方法などが分からず、支援を必要としている生徒もみられる。

本校の取組の特徴

- ・ピア・サポート活動やアサーショントレーニングを通して、生徒のコミュニケーション能力を育成する。
- ・「ほっとプラス」、「アセス」等を活用し、実施集団の特性や個人の集団適応状態を把握し、支援を必要とする生徒に対して、個別面談やカウンセリングを実施する。
- ・ソーシャルスキルトレーニング（SST）を通して、良好な人間関係を構築する。
- ・自殺予防教育の充実を図り、自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する知識を高める。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月12日	SSTの実施①	○	○	○	全学年
4月25日	SSTの実施②	○	○	○	全学年
4月26日	宿泊研修における集団カウンセリングの実施（場所：仁木町ドミトリ、講師：本校職員）	○	○	○	1学年
5月9日	SSTの実施③	○	○	○	全学年
5月10日	SSTの実施④	○	○	○	1、3学年
5月16日	SSTの実施⑤	○	○	○	全学年
5月31日	「アセス」の実施				1、2学年
5月31日	「心と体のアンケート」の実施				全学年
6月6日	SSTの実施⑥	○	○	○	全学年
6月7日	思春期教室の実施		○		2学年
6月14日	SSTの実施⑦	○	○	○	全学年
6月18日	パートナーティーチャーによる指導・助言	○	○	○	全学年
6月19日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年
6月20日	SSTの実施⑧	○	○	○	全学年
6月27日	SSTの実施⑨	○	○	○	全学年
7月3日	思春期教室の実施		○		3学年
7月4日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年

Web公開用

平成30年度高校生ステップアップ・プログラム

7月4日	SSTの実施⑩	○	○	○	全学年
7月30日	全校ボランティアの実施	○		○	全学年
8月23日	SSTの実施⑪	○	○	○	1学年
9月7日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年
9月12日	SSTの実施⑫	○	○	○	全学年
9月13日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年
9月19日	SSTの実施⑬	○	○	○	全学年
9月25日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年
10月3日	SSTの実施⑭	○	○	○	全学年
10月10日	SSTの実施⑮	○	○	○	全学年
10月18日	SSTの実施⑯	○	○	○	3学年
10月22日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年
10月24日	「心と体のアンケート」の実施				全学年
10月30日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年
10月31日	パートナーティーチャーによる指導・助言	○	○	○	全学年
11月6日	SSTの実施⑰	○	○	○	全学年
11月12日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年
11月19日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年
11月21日	「アセス」の実施				1、2学年
11月21日	SSTの実施⑱	○	○	○	全学年
11月22日	自殺予防教育プログラムの実施	○		○	1学年
12月3日	自殺予防教育プログラムの実施	○		○	1学年
12月4日	SSTの実施⑲	○	○	○	全学年
12月5日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年
12月5日	自殺予防教育プログラムの実施	○		○	1学年
12月6日	自殺予防教育プログラムの実施	○		○	1学年
12月17日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年
12月19日	SSTの実施⑳	○	○	○	全学年
1月17日	SSTの実施㉑	○	○	○	1、2学年
1月23日	スクールカウンセラーによる個別面談の実施		○	○	全学年
1月24日	SSTの実施㉒	○	○	○	1、2学年
1月30日	SSTの実施㉓	○	○	○	全学年
2月5日	「ほっとプラス」の実施				1、2学年
2月7日	SSTの実施㉔	○	○	○	1学年
2月13日	SSTの実施㉕	○	○	○	1、2学年
2月14日	思春期教室の実施		○		1学年
3月13日	SSTの実施㉖	○	○	○	1、2学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

(1) 思春期教室

○ ねらい

対話型ワークショップを行うことにより、生徒に自分自身の将来について考えさせるとともに、コミュニケーション能力の向上を図る。

○ 対象 全学年

○ 内容

3年生は社会人を、2年生は大学生を、1年生は卒業を控えた3年生を講師として、これから先の進路等について、講師の体験談などを聞き、質疑応答を行うことにより、自分の将来について考える。

○ 成果

円滑なコミュニケーションを図るためには、挨拶や笑顔、表情が重要であることについて理解を深めることができた。また、講師の体験談やアドバイスを踏まえながら、今後の生活や行動の在り方について、考えを深めることができた。



「思春期教室」(2学年)



「思春期教室」(3学年)

(2) ソーシャルスキルトレーニング (L I F E)

○ ねらい

他者との関わり方や集団の中での行動の在り方などに関するトレーニングを通して、自己のコミュニケーションについて振り返らせるとともに、思いやりの気持ちを持ち、他者とよりよい関係性を築く力の育成を図る。

○ 対象 全学年

○ 内容

① 朝学習の10分間やLHR、総合的な学習の時間において、ワークを行う。

② ワークの最後に、生徒は振り返りシートを記入し、担任が振り返りとシェアリングを行う。

③ ワークの内容は、学年やクラスからの要望を受け、生徒の実態に応じたワークをLIFE委員会が作成する。

○ 成果 (生徒の感想)

・活動する前よりも、みんなと仲良くなれたと感じている。また、自分自身のことを知ることができてよかった。

・あまり話したことのない人とも話すことができた。いろいろな人がいて、いろいろな考え方があることに気付いた。

・相手の目を見て話すことなど、当たり前であると思っていたことが、あまりできていないことに気付いた。今後、意識していきたい。

・人とのコミュニケーションについて考えることで、自分のことを考えるきっかけになった。これからは、自分のことも相手のことも考えながら生活したい。

2 自殺予防教育の取組

○ ねらい

心の危機のサインを知り、心身が不調なときの対応について考えさせる。

○ 対 象 1 学年

○ 内 容

2クラス合同で、「心と体の健康について」の授業を行う。

○ 成 果

生徒は、心の危機や自分自身の心身の不調に気付いた際に、周りの人に相談することが自殺予防に有効であることを理解することができた。また、周りの人の心身の不調に気付いた際には、声かけをしたり、他の人に相談したりすることが自殺予防に有効であることを理解することができた。

心と体は密接に関係していることや心身の相関関係、ストレスコントロールの方法などについて理解することができた。



「自殺予防教育プログラム授業」(1学年)

3 スクールカウンセラーによる支援

○ ねらい

悩みを相談し、専門的なアドバイスを受けることにより、精神的な安定を図る。

○ 対 象 全学年

○ 内 容

1人当たり、50分程度の個人面談を行う。

○ 成 果

スクールカウンセラーから、現状や実態に応じた専門的な指導や助言を受けることにより、安心して学校生活を送ることができる生徒が増えている。

悩みを抱えた生徒に対する支援の在り方などについて、教員がスクールカウンセラーから助言を受けることにより、教員の教育相談に係る能力の向上につながっている。

次年度に向けて

1 成果の検証

- (1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

計画的にソーシャルスキルトレーニングを実施したことにより、生徒のコミュニケーション能力が向上するとともに、良好な人間関係の構築に向けた意識が高まった。今後も継続して実施することで、一層の成果が期待できる。

- (2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

本プログラムに取り組むことにより、学校全体でいじめの未然防止や早期発見、早期対応への意識を高めることができた。今年度認知したいじめについては全て解消している。

悩みを抱える生徒が、スクールカウンセラーとの面談を希望したり、教員に相談したりするなど、生徒の援助希求的態度の育成を図ることができた。

中途退学者数の減少に向けて、引き続き、本プログラムを活用して支援の充実を図る必要がある。

- (3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

計画的にソーシャルスキルトレーニングを実施したことにより、生徒のコミュニケーション能力の向上を図ることができ、良好な人間関係の構築に向けた意識が向上した。

取組を重ねるごとに、生徒が意欲的に取り組む姿勢が見られた。

- (4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

本プログラムの研究指定は、今年度で3年目となり、教員の理解は十分に進んでいる。特に、教育相談に係る教員の知識や技能の習熟が図られている。

2 課題

ソーシャルスキルトレーニングは、担当者（担任）を固定して指導する形態になっているため、クラスによって指導の成果に差異が見られる。今後の改善点として、実施方法や実施時間、担当者等を検討し、より効果的に実施することができる方策を検討する必要がある。

「ほっと」・「ほっとプラス」や「アセス」等を活用した生徒理解の充実を図るために、分析方法などについての研修会を行うなど、一層、活用の在り方について研鑽を深める必要がある。

3 次年度に向けて

スクールカウンセラーと連携した教育相談や自殺予防教育、ソーシャルスキルトレーニング等の取組を学校の全体計画に取り入れるなど、今まで以上に生徒のコミュニケーションスキルの向上や中途退学者数及び保健室相談者数等の減少が図られるよう、組織的に学校全体で取り組んでいく。

「ほっと」・「ほっとプラス」や「アセス」の効果的な活用に向け、講師を招いて分析方法等の研修会を行うなど、生徒理解の充実や指導力の向上を図る。

北海道追分高等学校

課程：全日制
 学科：普通科
 生徒数：101名

本校の目指す生徒像

1. 主体的・協働的に学習に向かう生徒
2. 自律的に行動し、実践力のある生徒
3. 豊かな感性をもち、他者に寛容な生徒
4. 相手の意見を尊重し、自分の意志を表現できる生徒

本校の現状

発達の課題等により、中学校までに支援を受けてきた生徒や不登校経験のある生徒がみられるため、生徒の自己肯定感の向上とコミュニケーション能力の育成に継続的な指導が必要である。

本校の取組の特徴（個に応じた指導とコミュニケーション力を高め、自己有用感を育む取組）

- ・定期的な生徒サポート委員会を実施し、多様な個々の生徒に対応した組織的な支援の充実を図る。
- ・生徒の発表力及びコミュニケーション能力を身に付ける教科指導を継続する。
- ・リーダー研修により、要となる生徒のスキルアップを図り、リーダーによるピアサポート活動を通して温かい学級集団づくりを実現する。
- ・異年齢集団との交流学习やボランティア活動を推進し、生徒の自己有用感を高める。
- ・自殺予防教育プログラムの実施により、生徒に自殺予防について正しい知識を身に付けさせ、生徒の援助希求的態度及びストレスに対処できる能力を育成する。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月10日	特別支援連絡会議				
4月11日	1年生LHR集団コミュニケーショントレーニング	○	○		1年
4月17日～18日	前期リーダー研修	○	○		代表
5月10日	教科学年生活会議				
5月11日	生徒サポート委員会				
5月13日	ボランティア活動（ノーザンホースパークマラソン）	○	○		希望者
5月	異年齢交流①（町内パークゴルフ協会、高齢者福祉施設の訪問、3年生選択授業）	○	○		3年
5月31日	生徒サポート委員会 1学年ケース会議				
6月1日	学校祭前リーダー研修	○	○		代表
6月3・17・24日	ボランティア活動（町内小学校・子ども園運動会）	○	○		希望者
6月6日	hyper-QU 実施 1回目				全学年
6月7日	1、3年ケース会議（パートナーティーチャー出席）				
6月	異年齢集団交流②（町内パークゴルフ協会、高齢者福祉施設の訪問、3年生選択授業）	○	○		3年
6月	教科担任アンケート（チェックシート配布）				
6月25日	1年生教科会議				
7月2日	性教育講話	○	○	○	全学年
7月7日	「ほっと」実施1回目				全学年
7月12日～13日	学校祭	○	○		全学年

7月24日	hyper-QU、「ほっと」結果報告（定例職員会議）				
7月25日	「ほっとプラス」実施、学校生活の振り返り				
7月25日	インターンシップ報告会	○	○		2年
7月26日	ボランティア活動（小学校学習支援）	○	○		希望者
7月29日	ボランティア活動（町内福祉施設夏祭り）	○	○		希望者
7月31日	生徒サポート委員会				
9月14日	胆振東部地震SC緊急派遣（職員研修・面談）				
9月18日	学校再開 全校集会 心とからだの健康調査				全学年
9月19日～20日	SC緊急派遣（調査結果を基に生徒面談）			○	全学年
10月4日	自殺予防プログラムの実施保健（早期の問題認識）	○	○	○	2年
10月9日	生徒サポート委員会				
10月10日	自殺予防プログラムの実施保健（ストレス対処能力育成）	○	○	○	2年
10月16日	後期リーダー研修	○	○		代表
10月31日	1、3年ケース会議（パートナーティーチャー出席）				
11月6日～9日	見学旅行	○	○		2年
11月14日～16日	宿泊研修 集団コミュニケーショントレーニング	○	○		1年
11月18日	ボランティア活動（町内福祉施設敬老会）	○	○		希望者
11月19日	生徒サポート委員会				
12月5日	hyper-QU 実施 2回目				全学年
12月12日	自殺予防プログラムの実施保健（早期の問題認識）	○	○	○	1年
12月12日	1、3年ケース会議、校内研修（教育局特別支援教育SV、PT、教育局指導主事出席）				
12月13日	見学旅行報告会	○	○		2年
12月13日	教科学年生活会議				
12月20日	自殺予防プログラムの実施保健・ストレス対処能力育成	○	○	○	1年
12月25日	自殺予防プログラムの実施保健・ストレス対処能力育成	○	○	○	1年
1月23日	「ほっと」「ほっとプラス」実施 2回目				全学年
1月24日	hyper-QU 2回目 結果報告（定例職員会議）				
1月31日	学習成果発表会	○	○		全学年
2月1日	生徒サポート委員会				
2月2日	ボランティア活動（町内ロビーコンサート）	○	○		希望者
2月14日	「ほっと」「ほっとプラス」結果報告（定例職員会議）				

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

○ 校内リーダー研修

(1) ねらい

生徒のコミュニケーション能力を高め、クラスや学校生活の中での仲間意識の醸成や他者への支援援助ができるリーダーを育成する。

(2) 対象

生徒会執行部、学級委員長、委員会委員長、学校祭実行委員等

(3) 内容

年に4回リーダー研修を実施し、学校及び学級の中心となる生徒同士の交流を深めた。学校及び学級の代表としての困り事を共有し、リーダー同士が互いに相談しやすい雰囲気作りを行った。

(4) 成果(反省含む)

学校及び学級の代表としての自覚が生まれ、ピアサポーターとしてクラスメイトや先輩の相談にのる場面が見られるようになった。

○ 異年齢交流（選択教科・ボランティア活動）

(1) ねらい

学校外のような年齢層の人との交流を通し、生徒のコミュニケーション能力や自己有用感を育成する。

(2) 対象

3年生、ボランティア参加希望者

(3) 内容

福祉施設での高齢者の方との交流、パークゴルフ協会とパークゴルフ交流、運動会ボランティアでの幼児・児童との交流を実施した。

(4) 成果（反省含む）

異年齢交流を通し、参加者の方々から感謝の言葉や笑顔をもらうことで、生徒の自己有用感を高めることができ、意欲的に活動する生徒が増えた。

2 自殺予防教育の取組

○ 自殺予防プログラムの実施

(1) ねらい

- ・青少年の自殺の深刻な実態について理解させ、生徒が自分自身の心身不調時の対応について学ぶ。
- ・「ほっとプラス」を実施し、生徒のストレスに対処できる能力を育成する。

(2) 対象

全学年

(3) 内容

保健体育の授業（1、2年生）とLHR（全学年）で実施し、自殺に関する考えについて生徒各自がまとめたワークシートを全員に配付し、自殺に関する他者の考えを共有した。

(4) 成果（反省含む）

- ・ワークシートの共有により、ストレスによる心身のサインが出た時の解決策について生徒に考えさせ、各自が行っているストレスの対処法について意見を共有できた。
- ・「ほっと」、「ほっとプラス」の実施により、生徒が自己の考え方の特徴を知ることができた。

3 スクールカウンセラーによる支援

○ 個別面談の充実

(1) ねらい

コミュニケーションを苦手としており、人間関係の構築に困難を抱える生徒への継続的なカウンセリングを実施し、生徒自身の気持ちの整理とコミュニケーション能力の向上を図る。

(2) 対象

全校生徒

(3) 内容

月1回の個別面談、スクールカウンセラー便り（保健便りに掲載）によるコミュニケーション能力育成のための啓発活動、及び胆振東部地震の際のスクールカウンセラーの緊急派遣により教職員及び生徒の心身の健康管理を行った。

(4) 成果（反省含む）

- ・今年度、継続的に面談をしていた生徒は5名おり、継続的なカウンセリングにより自分自身の気持ちの整理の仕方を学び、コミュニケーション能力を身に付けることができた。
- ・胆振東部地震による緊急派遣ではスクールカウンセラーによる教職員向けの研修を実施し、被災生徒の対応や生徒観察のポイントについて理解を深めることができた。また被災後に不眠や夜間覚醒などの不調を訴えていた生徒に対し、スクールカウンセラーによる早急なカウンセリングを行った。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) hyper-QU、「ほっと」の結果

ア 1年生

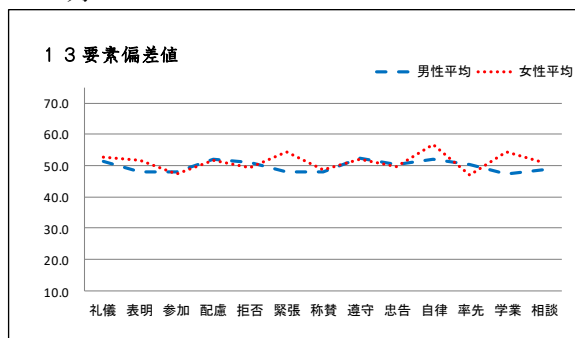
◎ hyper-QUによる学級の分析結果

6月、12月の実施結果は共に「ゆるみのある学級集団」となった。一見、生徒たちが元気で伸び伸びとした活気のある雰囲気のある学級に見えるが、学級内のルールの曖昧さや行動規範の低下が考えられる。自己主張ができ、自分の思い通りに活動できる小グループが満足している反面、自分の思いを上手く伝えることができず、対人関係に苦手意識をもっている生徒や、グループに入れない生徒に学級不適応の兆候が出てくる可能性がある。

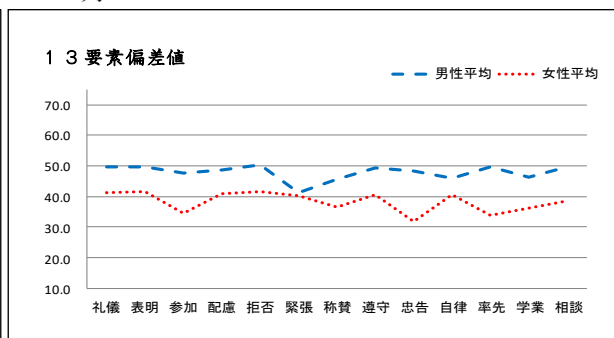
◎ 「ほっと」結果の比較

1月の結果から、6月よりも全体的に女子生徒の偏差値が下がった。後期に入り、不登校傾向の生徒が数名出てきたことや、もともと女子生徒の人数が少ないことが全体の偏差値に影響していると思われる。

6月



12月



イ 2年生

◎ hyper-QUによる学級の分析結果

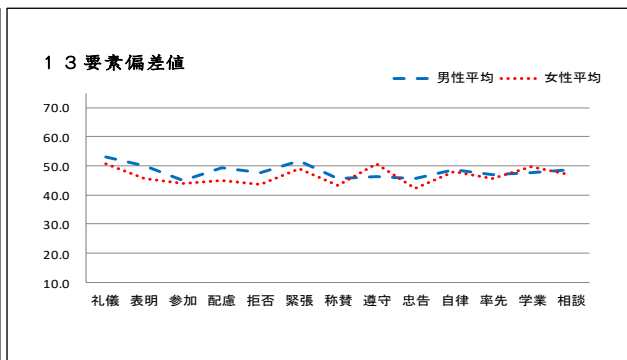
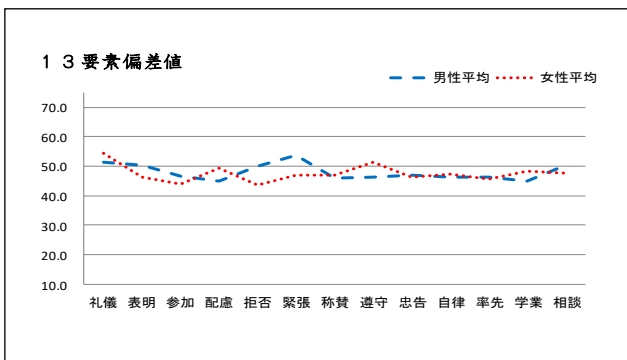
6月の「かたさのある学級集団」という結果から、12月には「荒れのみられる学級集団」に変化した。学校生活に満足感がある一部の生徒たちと、満足感が得られていない生徒たちとの意識が大きく分離してしまっていると想定される。不満足感のある生徒たちは、学級内で不適応感を強く感じており、ストレスが高まっていると考えられる。本学級は生徒たち一人一人の「学習意欲」は相対的に高いが、「学級との関係」の学級平均が低く、学級集団の活動が停滞気味な状態であると考えられる。

◎ 「ほっと」結果の比較

1月の結果から、13項目では6月と比べ大きな変化は見られなかったが、女子の配慮の項目が低下した。男女ともに参加・賞賛の項目が低い。

6月

1月



ウ 3年生

◎ hyper-QUによる学級の分析結果

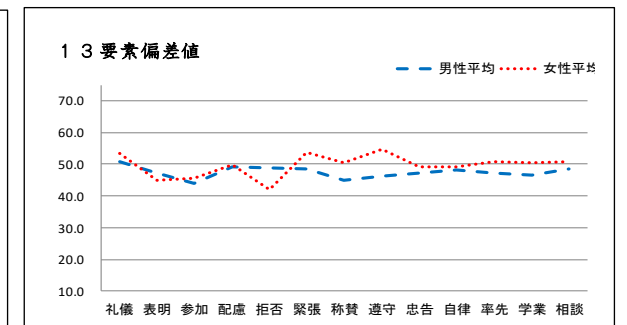
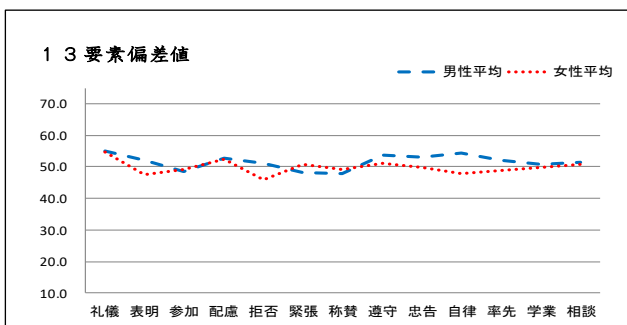
6月、12月の実施結果共に、「ゆるみのある学級集団」であった。一見、生徒たちが元気で伸び伸びとした活気のある雰囲気のある学級に見えるが、学級内のルールの曖昧さや行動規範の低下が考えられる。自己主張が強く、自分の思い通りに行動する小集団が満足している反面、自己主張ができず、対人関係に苦手意識をもっている生徒や集団に入ることができない生徒に学級不適応の兆候が出てくる可能性がある。

◎ 「ほっと」結果の比較

6月と比較すると全体的に落ち込みが見られる。13項目では、女子の「拒否」に落ち込みが見られるが、「賞賛」や「遵守」の項目が高くなっている。一方男子は、「参加」、「称賛」、「学業」に落ち込みが見られる。

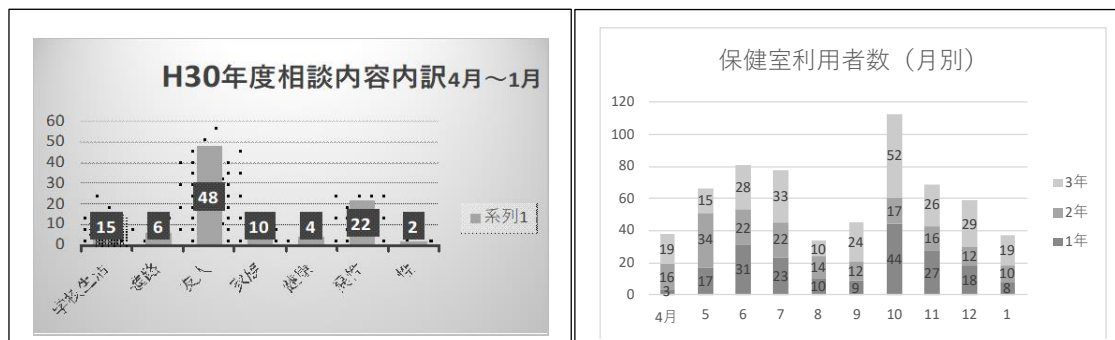
6月

1月



(2) 保健室来室状況と相談件数

1月末現在の保健室利用状況は620名であり、10月に1、3年生の利用が増えた。9月の胆振東部地震後、不眠や頭痛などの体調不良や情緒不安定になる生徒もみられたため、スクールカウンセラーと連携し個別面談に力を入れた。3年生は就職試験の準備不足からくるストレスや、人間関係のトラブルなど課題が多くみられた。相談件数は、107件と去年の同時期の2倍となっている。1年生についてもコミュニケーション不足による友人間のトラブルが見られたため、学年団を中心にした個別面談を継続している。



(3) ボランティア参加状況

生徒会やボランティア同好会のメンバーが中心となり、各ボランティア活動への参加を呼びかけ、参加延べ人数が28年度120人、29年度133人、30年度103人と、この3年間では毎年100人以上を維持しており、リーダー研修でのトレーニングが各活動の働きかけへと活かされている。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

本校では、多くの教員の連携協力のもと、学習やコミュニケーションに苦手意識をもつ生徒の自己肯定感を育む様々な取組を継続して実施している。

2 課題

hyper-QUや「ほっと」の結果に表れているように、学級の状況は一部の自己主張が強く、学校生活に満足感を得られている生徒たちの集団と、自己主張ができずに対人関係に苦手意識をもっており、満足感が得られない生徒たちの集団に分離している状況である。アンケート実施時期が胆振東部地震後であることから、地震によるストレスが結果に影響していると考えられるが、個々の自己肯定感を育む取組の継続と他者への思いやりをもった集団づくりが必要である。

3 次年度に向けて

(1) 個々に応じた指導

- 定期的な生徒サポート委員会を実施し、多様な個々の生徒に対応した組織的な支援の充実を図る。

(2) コミュニケーション力を高め自己有用感を育む取組

- 生徒の発表力及びコミュニケーション能力を育成する、継続した教科指導を行う。
- 異年齢集団との交流学习やボランティア活動を通して、生徒の自己有用感を高める。
- 自殺予防教育プログラムの実施により、生徒に自殺予防について正しい知識を身に付けさせ、生徒の援助希求的態度やストレスに対処できる能力を育成する。

(3) 集団づくり

- リーダー研修を実施し、参加生徒のコミュニケーション能力の育成を図るとともに、リーダーによるピアサポート活動を行い、温かい学級集団づくりを実現する。
- 集団カウンセリングの計画と実施。

北海道鷗川高等学校

課程：全日制
学科：普通科
生徒数：151名

本校の目指す生徒像

一人ひとりの個性を伸ばし、明るく豊かでたくましい人間を育成する。

本校の現状

精神的に不安定で対人関係等、学校生活に不安を抱える生徒がみられることから、コミュニケーションスキルの向上を図る必要がある。

本校の取組の特徴

- 「コミュニケーションスキルアップトレーニング（CST）」の取組
心の教育ワーキンググループを中心に、コミュニケーションスキル向上のためのトレーニングや人間関係づくりを支援する、集団カウンセリングなどの取組を継続的に実施している。
- 充実した教育相談活動
教育相談担当教員が中心となり、スクールカウンセラーによる個別カウンセリング、担任や学年団による日常的な個別の面談、全校生徒対象の教育相談を実施している。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月12日	「ほっと」の実施				全学年
4月25日	宿泊研修における集団カウンセリングの実施（CST①） （場所：北海道青少年会館 コンパス、講師：石川正人氏）	○	○		第1学年
5月10日	中学校と連携したボランティア活動	○	○		全学年
5月17日	CST②～自己開示と他者理解		○		第1学年
6月11日	教育相談①（～6月22日）			○	第1学年
6月12日	教育相談①（～6月22日）			○	第2学年
6月13日	CST③～ルールについて考えよう	○			第1学年
6月15日	教育相談①（～6月22日）			○	第3学年
6月25日	CST①～上手な話の聞き方を身に付けよう	○	○		第2学年
7月17日	CST④～自分の考え方の特徴を理解しよう	○		○	第1学年
7月17日	「ほっとプラス」の実施				第1学年
7月26日	「ほっとプラス」の実施				第2学年
9月6日	胆振東部地震による臨時休校及び学校再開後の対応協議 （～9月11日）			○	全学年
9月12日	臨時教育相談（～9月14日）			○	全学年
9月20日	ストレスマネジメントに関する講演会（講師：石川正人氏）	○	○	○	全学年
10月15日	「ほっと」の実施				全学年
10月16日	教育相談②（～10月19日）			○	1学年
10月17日	教育相談②（～10月19日）			○	2学年
10月18日	教育相談②（～10月19日）			○	3学年
11月5日	CST～「絵本セラピー」の実施	○	○		1学年
11月29日	CST～「絵本セラピー」の実施	○	○		3学年
12月17日	CST～「絵本セラピー」の実施	○	○		2学年
1月18日	「ほっと」「ほっとプラス」の分析結果共有				全学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

○ 「絵本セラピー」の実施

(1) ねらい

- ①不登校や中途退学の未然防止のため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る「高校生ステップアップ・プログラム」事業の一環として実施した。
- ②絵本を使用して生徒が自分の感情や考えを表現したり、他者の感情や考えを受け入れる経験を通して、コミュニケーション能力の育成を図った。

(2) 対象

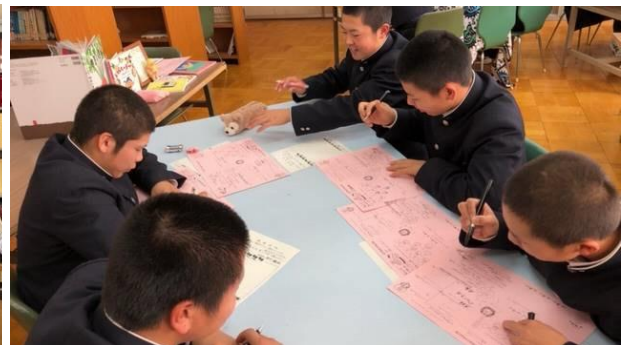
全学年を対象とする。(1学年：11月5日、2学年：12月17日、3学年：11月29日)

(3) 内容

絵本の読み聞かせの活動を通して、自己理解と他者を受容する態度の醸成を図った。

(4) 成果(反省含む)

- ①活動を通して、前向きに他者への理解を示す生徒が多くいた。
- ②「絵本セラピー」は今年度5年目を迎え、講師との連携を図ることができており、今後も継続して活動を行う予定である。



2 自殺予防教育の取組

○ ストレスマネジメントに関する講演会

(1) ねらい

- ①生徒が学校生活等で生じるストレスに対して理解することで、生徒の心身の健康を保つことを目指した。
- ②自殺予防の知識やメンタルヘルスケアについて、生徒の理解促進を図った。

(2) 対象

全学年を対象とする。(9月20日実施、1学年：2h、2学年：3h、3学年：4h)

(3) 内容

それぞれの学年に応じて、生徒が学校生活で受けるストレスの種類を理解し、その対処方法についての講演を行った。

(4) 成果(反省含む)

- ①生徒のストレスに関する知識・理解を深めることができた。
- ②胆振東部地震直後の実施であったため、生徒たちが地震から非常に強いストレスを受けていることを知る契機となった。

3 スクールカウンセラーによる支援

○ 定期来訪時におけるカウンセリング

(1) ねらい

希望者や特別な支援を要する生徒、担任がカウンセリングの必要性を感じた生徒を中心に、定期来訪時に教育相談を実施し情報共有を図る。

(2) 対象

希望者、サポート対象者及び各担任が必要と感じた生徒及びその保護者

(3) 内容

スクールカウンセラーによるカウンセリングを実施し、校内での情報共有を行った。

(4) 成果（反省を含む）

①胆振東部地震後には、生徒のメンタルヘルスケアの方法等について、スクールカウンセラーから教職員へアドバイスをもらうことができた。

②生徒一人一人に関する情報を共有することで、生徒への支援に役立てることができた。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

胆振東部震災後の取組の際には、その都度面談や質問紙調査を通して生徒の心の変容を学校全体で観察・共有するよう努めた。

また、心の問題を抱えている生徒のサポートだけでなく、生徒たちの援助希求的態度を育てるための活動も実施した。「ほっと」の数値を分析すると、特に女子の援助希求的態度の成長が見られた。今後も引き続き予防開発的な教育相談の手法を取り入れて行きたい。

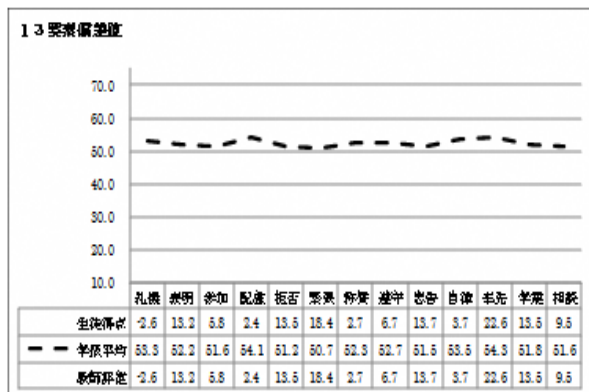


図1 学校全体の数値平均

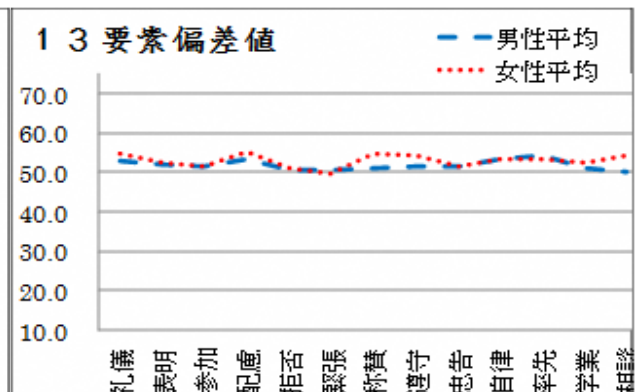


図2 数値平均の男女比較

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

不登校の主たる要因については、前年度「不安」「その他」であったのに対し、今年度は「学校における人間関係」「無気力」であった。

いじめについては、昨年度は認知件数0だったのが今年度4件に増加した。しかし担任や部顧問、いじめ防止対策委員会等、関係各所が連携を図り解決することができた。

(3) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

昨年度は校内研修会を実施し、本プログラムでの取組状況や集団カウンセリングの技術、CSTの実施内容について職員全体で共有する場面があったが、今年度は実施できなかった。次年度以降は再度校内研修会を設定し、集団カウンセリングの技法を改めて職員全体で共有し、本取組の内容を周知する必要がある。

2 課題

- (1) 特別な指導が必要な生徒や、人間関係で悩みを抱える生徒が多く、生徒のコミュニケーションスキルの育成を図る必要がある。
- (2) 不登校という形で表出してはいないが、人間関係で深く悩んでしまう生徒が多くなっているため、今後は受容的・共感的なクラスづくりができるよう校内での連携を図る必要がある。
いじめに関しては、今後も発生後の対策について継続し、「いじめの未然防止」という観点からの指導も強めていく必要がある。
- (3) 各種研修会や他校における実践例を通して、教員全体がスキルアップを図り、「ほっと」のクラス運営への効果的な活用方法等、自校での全ての教育活動につなげられるよう、校内研修会を実施する必要がある。
- (4) 生徒指導部教育相談担当、生徒サポート委員会、心の教育ワーキンググループ等の教育相談体制を整理し、連携を図る必要がある。

3 次年度に向けて

- (1) 生徒の実態を正確に把握するため、次年度以降も年2回、全生徒を対象とした教育相談を実施し、特別支援コーディネーターや生徒サポート委員会、パートナーティーチャーやスクールカウンセラーと連携を図る。また、特に支援が必要な生徒に対しては、個別の支援計画の作成を進めていく。
開発的な教育相談の視点から、CSTやピア・サポート活動等のより一層の充実を図る必要がある。生徒サポート委員会や心の教育ワーキンググループ等と連携しながら校内研修会を実施し、集団カウンセリングの技法について全教職員で共有し、学年やクラス単位での実施を目指す。
- (2) 「ほっと」「ほっとプラス」については、各研修会等で得た他校の実践例や活用方法を校内で共有し、本校での取組に還元する。そのため、これらのツールの活用方法について校内研修会を実施し、全職員へ利用方法の周知を行う。
「ほっと」については、活用の方向性が確立しつつあるため、次年度以降は「ほっとプラス」の積極的な活用を目指す。
- (3) 教育相談体制の整理を行い、特にCSTを含む集団カウンセリングの実施については、次年度以降、本プログラムの担当者がより一層主体的に関われるようにする。

北海道浦河高等学校

課程：全日制
 学科：総合学科
 生徒数：387名

本校の目指す生徒像

- ・自ら考え、正しく判断、行動することができる生徒
- ・多様性を認め合い、よい人間関係を形成することができる生徒
- ・よく努力し、意欲的に物事に取り組むことのできる生徒

本校の現状

- ・素直な生徒が多く、また、与えられた課題等には意欲的に取り組むことができる。その一方で、自ら主体的に判断し、行動することができない傾向がみられる。
- ・心が不安定となり、欠席が多くなる生徒がどの学年にも在籍している。

本校の取組の特徴

- ・子ども理解支援ツール「ほっと」、「ほっとプラス」及び「hyper-QU」などを実施し、本校生徒の実態を把握し、集団の特性を踏まえたプログラムによりコミュニケーションスキルの向上に努めている。
- ・スクールカウンセラーによる悉皆面談を実施し、スクールカウンセラーの役割や活用方法について学び、援助希求的態度の育成に努めている。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月26日	宿泊研修でコミュニケーションスキル（アサーティブなコミュニケーション）を育成するためのトレーニングの実施 （会場：ひだか青少年自然の家、講師：本校キャリアガイダンス部）	○	○		1年次
5月10日、5月17日	職業人講話の実施（講師：日高振興局、様似町役場、ほか地域の事業所の方）		○		1年次
6月22日	上級学校見学・職場見学の実施	○	○		1年次
7月9日	生徒が主体となったレクリエーションの実施	○			全年次
7月24日	「ほっと」及び「hyper-QU」（1回目）の実施				全年次
8月22日、8月29日	思考ツール学習の実施		○		1年次
10月22日～12月10日	スクールカウンセラーによる悉皆面談の実施			○	1年次
11月6日	保健講話の実施（内容：「SOSが出せる人になろう」、講師：町内の心療内科医師）	○	○		全年次
11月21日	「ほっと」（2回目）の実施			○	全年次
11月26日	「ほっとプラス」（1回目）の実施			○	全年次
12月17日～12月19日	障がい体験実習の実施			○	1年次
1月21日	「ほっとプラス」（2回目）の実施			○	全年次
1月21日	講話の実施（内容：当事者研究、精神疾患について、講師：北海道医療大学教授）			○	1年次
2月5日	「hyper-QU」（2回目）の実施				1、2年次
通年	自殺予防プログラムの実施（4時間）			○	全年次

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

(1) コミュニケーションスキルを育成するためのトレーニング（アサーティブなコミュニケーションの取り方）

①ねらい

望ましい人間関係が構築できるように、アサーティブなコミュニケーションのための知識と技能を習得するために実施した。

②対象

1年次生徒（120名）

③内容

宿泊研修で、1年次生徒全員がアサーションに関する講義を受けた。生徒は講師の作成したワークシートに取り組んだのち、生徒同士でペアになりロールプレイを体験し、感想交流を行った。



【ロールプレイに取り組む様子】

④成果

葛藤する場面での自己表現の具体的な方法について、活動を交えて学ぶことができた。受講した生徒からも、すぐに友人とのコミュニケーションの中で実践できる内容であったと好評であった。今後も、取組内容の精選を図りながら、継続したい。

(2) 生徒が主体となったレクリエーション

①ねらい

学校祭の準備期間を控え、クラスや年次内で話し合いのしやすい雰囲気をつくり、円滑に準備に当たれることを目的に実施した。

②対象

全校生徒（年次単位に実施）

③内容

生徒が主体となってレクリエーションを企画した。各年次の生徒代表が当日の進行、説明等を担当し、体を動かしながら年次の生徒全員が取り組める意思疎通を目的としたゲームなどを実施した。

④成果

本取組を通じて、年次及びクラスで明るく楽しい雰囲気が醸成され、学校祭準備期間中は大きなトラブルもなく、成功のうちに、閉祭を迎えることができた。今後は、継続的な取組にしていくために、実施時期の再検討や時間の確保に努めたい。

2 自殺予防教育の取組

(1) 保健講話

①ねらい

よりよい人間関係を構築できるよう、援助希求的な態度の育成やアサーティブなコミュニケーションに関する知識や技能を身に付けることを目的に外部講師を招いた講演を実施した。

②対象

全校生徒

③内容

講師からデートDV及び異性間の望ましいコミュニケーションをテーマに講話を行ったあと、CAPプログラムのワークショップを実施した。

④成果

実施後の、生徒を対象としたアンケートでは、「人権について理解が深まった」「互いの気持ちを知ることが大事だと思った」等の回答が得られ、異性間コミュニケーションの在り方や互いの性を尊重する態度について理解を深めることができた。

取組の内容

3 スクールカウンセラーによる支援

(1) 悉皆面談

①ねらい

生徒が困難に遭遇した時に相談先としてスクールカウンセラーの存在があることを理解し、大人に対し援助を要請することができる態度を身に付け、豊かな高校生活を送れるように、年次生徒全員を対象とした面談を実施した。

②対象

1年次（120名）

③内容

昼休み及び放課後を利用して、スクールカウンセラーによる面談を1人当たり10分程度実施し、その日の話題や生徒の悩み等を聞いていただいた。

④成果

悉皆面談実施後に行ったアンケート調査では、スクールカウンセラーについて好意的に捉えている生徒の割合が増加するなど、必要な相談先としての認識が高まったものとする。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

- ・hyper-QUにより、学級環境適応感や学級満足度を検証した。概ね満足群に属する生徒が多い結果であったが、不満足群の生徒も一定数いたため、個別のアプローチが課題である。
- ・7月及び11月に「ほっと」を実施した結果、1年次では「相談」の項に1.6pt、「率先」の項に1.2pt、「表明」の項に1.0ptの増加が見られた。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

- ・本校における今年度の不登校生徒はなし、中途退学者は2名。
- ・いじめのアンケート調査を4回実施したが、認知はなかった。

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

科目「産業社会と人間」の授業において、「読む」「話す」といったトレーニングやアサーションのロールプレイを行い、コミュニケーション能力の育成を図っている。授業終了後のアンケートでは、「相手のことを考えた行動ができるようになった」「自分から判断して動くことができるようになった」と回答する生徒の割合が高くなった。



【トレーニングの様子】

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

朝の打ち合わせや職員会議の際に、ねらいや取組を全教職員に周知し、本プログラムの取組内容について理解を得た。担任団の協力もあり、全校生徒が積極的に取り組むことができた。

2 課題

- ・全教職員が、取組内容及び活用方法等について理解を深め、組織的、継続的に本プログラムに取り組む体制づくりを進める必要がある。
- ・悩みを抱えた生徒に対する、効果的な相談体制を確立することが課題である。

3 次年度に向けて

- ・本プログラムの取組を教育課程に位置付け、本校の育成を目指す資質・能力との関係で取組内容や効果指標の設定を行い、PDCAサイクルによりプログラムの改善を進める。
- ・スクールカウンセラー及び関係機関と連携し、計画的、継続的な教育相談体制を確立する。

北海道函館中部高等学校

課程：定時制
 学科：普通科
 生徒数：63名

本校の目指す生徒像

- ・ 周囲と協力して主体的に取り組む生徒
- ・ 社会に踏み出す勇気と力をもつ生徒

本校の現状

- ・ 人間関係でつまづいた経験をもつ生徒や様々な事情により社会性が十分に育っていない生徒がみられる。

本校の取組の特徴

- ・ 中途退学予防を主目的とする『中定プログラム』（平成27年度完成）を柱にした実践。
- ・ 今年度より援助希求的態度の育成、ストレス対処能力の育成プログラムを導入。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月	「アセス」の実施				全学年
6月11日	スクールカウンセラーによる集団カウンセリング実施	○	○		1年
6月25日	スクールカウンセラーによる集団カウンセリング実施	○	○		1年
7月20日	スクールカウンセラーによる集団カウンセリング実施	○	○		1年
9月21日	講演「自分を受け入れる生き方」実施	○		○	全学年
10月1日	アサーショントレーニングの実施	○	○		1年
10月15日	スクールカウンセラーによる集団カウンセリング実施	○		○	1・2年
10月22日	スクールカウンセラーによる集団カウンセリング実施	○	○		1・3年
11月12日	スクールカウンセラーによる集団カウンセリング実施	○		○	1・2年
11月	「アセス」の実施				全学年
1月	「ほっと」の実施と1年のふりかえり				全学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

スクールカウンセラーの指導による集団カウンセリングの実施。対象となる生徒の実態等を踏まえたプログラムとなるよう、事前に担任から情報提供を行い、実施プログラムを決定した。実施後は、担任とスクールカウンセラーが生徒の活動の様子から、気付いたことを情報交換し、生徒指導やクラス経営の参考とした。

2 自殺予防教育の取組

① ねらい

命の大切さを学び、他者への支援を求めることの大切さについて気付かせる。

② 対象

全学年



【講演「自分を受け入れる生き方」】

③ 内容

講演「自分を受け入れる生き方」の実施を通じて、自分を見失わない生き方の大切さを学習した。講師に道警函館方面本部生活安全課職員を招き、実際にあった過去の相談事例を振り返りながら、「不登校」や「リストカット」など、様々な原因から生じる問題について、実際に自分が直面した場合、どのように対処していけば良いかについて学んだ。その際、自分が抱える問題の解決を一人でしようとせず、周囲の友人や大人などに相談することが解決の近道であること、相談することの重要性についての確認がなされた。

④ 成果

講演をきっかけとして、道警函館方面本部生活安全課の職員が定期的に来校し、「中定悩み相談室」として生徒の相談相手となっている。生徒それぞれが向き合う課題に対して個別に具体的な助言を頂く活動を通して、生徒の援助希求的態度の醸成を図ることができた。

3 スクールカウンセラーによる支援

① ねらい

高校入学後できるだけ早い時期からエクササイズに取り組むことで他者と交流し、多様な考えや立場を理解する力を育成する。また、自分の考えを正確に伝えるとともに、自己の役割を果たしながら他者と協力・協働して社会に参画し、社会関係を積極的に形成することができる力を育成する。

② 対象

1年生～3年生

③ 内容

スクールカウンセラーにより、1年生に対して早期から重点的にソーシャルスキルトレーニングを行い、学年段階に応じて「自己主張」「上手な断り方」など他者との折り合いの付け方のトレーニングを実施した。

《取組例》

「他者と協力することの大切さを学ぶ」

壮大な迷路パズルにグループで取り組む。グループ学習の目的は「協力して問題を解決すること」。学習中は、「努力や物で協力すること」、「気持ちの面で協力すること」がテーマとして設定され、作業しやすいよう互いに席を入れ替えることや、楽しい雰囲気的活動すること、諦めそうなどきに励ますことが課題として学習活動の中に取り入れられる。



【コミュニケーショントレーニング①】



【コミュニケーショントレーニング②】

④ 成果

- ・高校生活への強い決意を後押しする形の活動となっているため、中学校時までの不登校を経験した生徒も、粘り強く高校生活を送ることができているなど、学校適応感が向上している。
- ・クラス内の人間関係に安定感が見られるようになり、学校行事などにも積極的にに関わり、感情表現を含む自己表現が豊かになってきている。



【コミュニケーショントレーニング③】

次年度に向けて

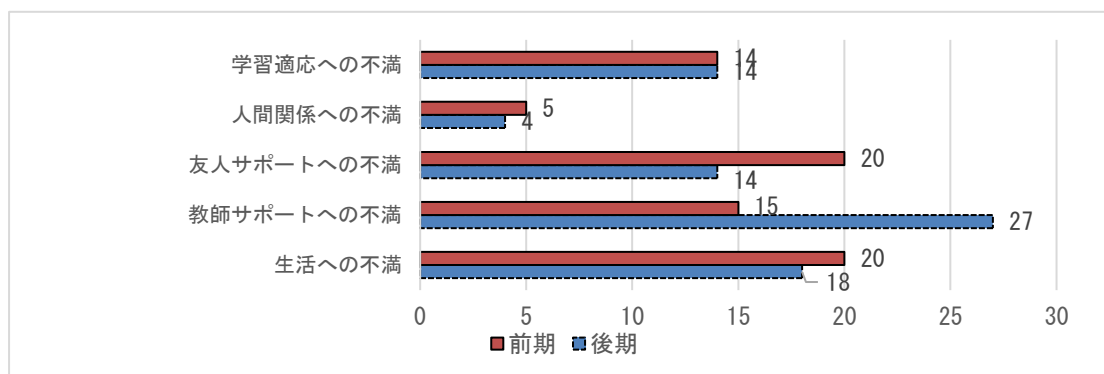
1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

学校適応感尺度「アセス」による前期（4月実施）と後期（11月実施）の変化を見ると、数値的に大きな変化はないものの、「人間関係への不満」や「友人サポートへの不満」そして「生活への不満」が後期において減少している。特に、「友人サポートへの不満」については、学校生活と友人関係が安定していく中で、周囲からの有形無形の支援が増加していることの証左として前期20ポイントから、後期14ポイントと大きな減少が見られる。

一方で、「教師サポートへの不満」は前期の15ポイントから後期には27ポイントと増加をしている。この傾向は、例年見られるものであり、生徒は「もっと教師に何とかしてもらいたい」と感じていることを表している。要因としては、教師側の活動が生徒のニーズに応えられていないこと、教師側の努力が生徒に伝わっていないことなどが考えられる。また個別のニーズに応えられるだけの学校体制が整備されていないことなども背景として考えられる。

【アセスによる学校適応感尺度の変化】



(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

不登校生徒数：平成29年度9名 ⇒ 平成30年度6名

中途退学者数：平成29年度2名 ⇒ 平成30年度10名

いじめの認知件数：平成29年度0件 ⇒ 平成30年度0件

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

集団カウンセリングに取り組む中で、良好な人間関係の形成が促進され、クラス内のコミュニケーションが円滑に行われ、学校生活に肯定的な姿勢が見られた。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

数年間の継続した取組として職員間で定着している。実施内容に変更はあるものの、職員間の共通理解のもとで、生徒の社会性向上のためのプログラムとして活用を図っている。

自殺予防プログラムについても、その重要性から今後も継続して取り組む予定である。

2 課題

発達課題を抱えた生徒が望むプログラム内容と学習するプログラム内容にミスマッチが生じていることから、プログラム内容の工夫が必要である。

3 次年度に向けて

発達課題を抱えた生徒に留意しながら、生徒全員が無理なく参加できるよう、事前に生徒個々の状況把握を行う。また、各実施内容の事後の反省を次回の取組へ反映させ、常に実施内容の充実を図りながら着実に計画を進める。

北海道函館工業高等学校

課程：定時制
 学科：工業科
 生徒数：40名

本校の目指す生徒像

- ・ 基本的な生活習慣が身に付き自立できる生徒
- ・ 勤労観や職業観をもち主体的に社会に関わることができる生徒
- ・ 心身ともに健康でたくましく心優しい生徒

本校の現状

- ・ 規範意識や倫理観の一層の育成が必要である
- ・ あきらめが早く忍耐力に乏しい傾向の生徒もみられる
- ・ 望ましい勤労観や職業観の育成が必要である

本校の取組の特徴

1・2学年において生徒が他者と望ましい人間関係を構築しながら、困難を乗り越え社会で生きていくために必要な力を身に付けるとともに集団に適応できるよう構成的グループエンカウンター（SGE）などを用いて「安全・安心なホームルームづくり、学年づくり」を目指している。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
5月18日	「ほっと」、「Q-U」1回目の実施				1～3学年
6月8日	SGEプログラム（遠足に向けた関係づくり）	○	○		1学年
6月21日	SGEプログラム（コミュニケーションスキルを高める）	○	○		2学年
7月4日	助言「Q-U」分析				1・2学年
7月6日	「ほっとプラス」1回目の実施				2学年
7月10日	自殺予防プログラムの実施（早期の問題意識1／2時間）			○	2学年
7月17日	自殺予防プログラムの実施（早期の問題意識2／2時間）			○	2学年
7月20日	自殺予防プログラムの実施（援助希求的態度の育成1／3時間）			○	1学年
8月31日	自殺予防プログラムの実施（援助希求的態度の育成2／3時間）			○	1学年
10月1日	講演「エネルギーを自分のために使う方法を考えてみましょう」		○	○	全学年
10月9日	自殺予防プログラムの実施（ストレス対処能力の育成1／4時間）			○	2学年
10月16日	自殺予防プログラムの実施（ストレス対処能力の育成2／4時間）			○	2学年
11月16日	自殺予防プログラムの実施（ストレス対処能力の育成3／4時間）			○	2学年
11月30日	自殺予防プログラムの実施（ストレス対処能力の育成4／4時間）			○	2学年
12月25日	「ほっと」、「Q-U」、「ほっとプラス」2回目の実施				1～3学年
1月16日	助言「Q-U」分析				1・2学年
2月15日	自殺予防プログラムの実施（援助希求的態度の育成3／3時間）			○	1学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

○SGEプログラム（コミュニケーションスキルを高める）

①ねらい・・・相手に関心をもつ。相手のことを知る。
自分の考えを受け入れられる感じを味わい、メンバーの多様な面を知る。友達の多様な考えを知り、お互いを認め合える人間関係を築く。自分の考えを主張する。

②対象・・・第2学年

③内容・・・「二人一組」、「他己紹介」、「無人島SOS」

④成果・・・第2学年の修学指導事業（宿泊研修）

の研修において、コミュニケーションスキルを高めることを目的としたSGEプログラムを実施した。各プログラム実施後に「ふりかえりシート」に感じたことや気付いたことを記入した。取組に対しては、ほとんどの生徒が楽しいと答えた。生徒の感想は様々で、「質問することに抵抗はなかった。」、「あまり聞いたことのないことを聞いたので新鮮だった」、

「他人のことを話したりするのは少し難しく、自分が質問して聞いたことを他人に説明するのは簡単なことではないことだと思った」、「いろいろ考えさせられて自分以外の意見が聞けてよかった。自分の考えを受け入れられた場面があってうれしかった」など、各プログラム実施後の振り返りに具体的な感想が多く見られた。入学当初に実施したプログラムの感想と比較すると、自分の気持ちを相手に伝えようとする自己開示ができており、大きな成果を得られたと感じている。



【SGEプログラム】

2 自殺予防教育の取組

○ストレス対処能力の育成（自分に置き換える）

①ねらい・・・相手のせいであるという原因の一方的な決めつけを見直し、双方に責任の分担があり得るという考え方を身に付ける。

②対象・・・第2学年

③内容・・・原因の選び方にはどのようなものがあるか（自罰－他罰）を考え、それぞれの偏った原因の選び方をした場合、その後の感情や行動に与える影響について考えた。

④成果・・・クラスを2つのグループに分け、失敗などを他人のせいにしてしまった経験について出し合った。その後、失敗などを他人のせいにする場合の表現、失敗などを自分のせいにする場合の表現について考え、グループ内で意見交換を行った。生徒の感想としては、「とてもためになった」、「1つの課題に真剣に話し合うことができた」、「自分がよくやってしまうことがタイムリーにできたのでよかった」などが得られた。「自罰と他罰」という難しいテーマではあったが、自罰や他罰どちらかに偏ることなく、バランスのとれた考え方が大切であることを確認することができたので、所期の目標は達成できたと感じている。

3 スクールカウンセラーによる支援

(1) 助言「Q-U」分析

- ①ねらい・「Q-U」検査の結果をもとに現状を分析し、今後の生徒対応に向けてのアドバイスをいただく。
- ②対象・1・2学年団及び教育相談・特別支援委員会
- ③内容・「函館大谷短期大学准教授 阿部千春氏」より、本校生徒の「Q-U」結果を分析し今後の対応等についての助言をいただく。
- ④成果・5月に実施した「Q-U」の結果と12月に実施した「Q-U」の結果について比較検討を行った。クラス全体の状況や、生徒個人の状況について検査結果より分析を行った。「安心・安全なHRづくり」を目指していくために今後どのような生徒対応をしていくのが望ましいかを学年ごとにグループ討議を行って、方向性を確認した。



【助言「Q-U」分析】

(2) 講演「エネルギーを自分のために使う方法を考えてみましょう」

- ①ねらい・社会で生きぬいていく力をつけるために生徒の自己肯定感を高め、他者とよりよい人間関係づくりができることを目的とする。
- ②対象・全学年
- ③内容・「北海道公立学校スクールカウンセラー 大杉ユリ子氏」による講演
- ④成果・エネルギーとは何か、エネルギーと感情の関係について考えながら、感情のコントロール方法について考えることの重要性や、気持ちを表に出すことの大切さについて講演をいただいた。感情をコントロールする上でリラックスするための呼吸法や筋弛緩法について実践を行った。講演会終了後の振り返りにおいて、「考え方を意識して変えようと思う。」、「感情のコントロール方法やリラックス方法について知ることができ、とても勉強になった。」、「自分にとって必要なことを知ることができたと思う。」、「無意識に対処している方法が、今日の講演でも話していたことだったので今後も続けていこうと思う。」などの感想が得られた。また、「自分自身に関わることなのでこのような講演会を増やして欲しい。」という感想もあり、生徒にとっては有効な講演会であった。



【講演「エネルギーを自分のために使う方法を考えてみましょう」】

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

5月および12月に実施した「ほっと」の比較検討を学年ごとに行った。1学年においては合計点の偏差値と人数分布に変化が見られ、偏差値50を超える生徒が1回目より増加している。13要素における変化については、学年の生徒数が10名程度であるため、全体の平均値では判断せずに、個別の要素偏差値の変化により、大きく変化した項目に着目して原因を分析し、今後の対策について検討を行った。2学年においては、5月、12月実施の比較において合計点の偏差値分布には大きな変化が見られないが、1学年時よりも向上している。それぞれの学年に合わせた取組を設定し、実施してきた効果が認められていると判断している。

1学年全体では、「発言や説明」の要素において、3.6ポイント上昇している。また2学年全体では、「助言や注意」の要素において、1回目から2回目に1.9ポイント、2回目から3回目に1.3ポイント上昇している。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

不登校生徒数：平成29年度0名 ⇒ 平成30年度1名

中途退学者数：平成29年度7名 ⇒ 平成30年度10名

いじめ認知件数：平成29年度0件 ⇒ 平成30年度3件 解消率66.7%

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

1学年においては、SGEプログラムを通じてクラス内のコミュニケーションが活発になりグループを形成するようになってきた。また、授業以外の活動においても少しずつ積極性が見られるようになった。2学年においては、活動の振り返りにおいて自己開示ができるようになり、自分が思っていることを伝えられるようになってきている。学校行事においても積極的な姿勢が見られる場面が多くなってきている。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

本プログラムに取り組んで3年目となるが、LHRにおいて担任が独自にSGEプログラムを実施するようになってきており、本プログラムの重要性が教員に浸透してきていることがうかがえる。また、多くの研修を通じて知識と理解を深めており、効果的な取組を実施している教員も増えてきている。本プログラムの重要性について認識しているものと思われる。また、自殺予防教育は、1学年で援助希求的態度の育成を2学年で早期の問題認識とストレス対処能力の育成を図ることができた。

2 課題

「ほっと」や「Q-U」で得られたデータの検証や分析は実施しているものの、効果的な活用までには至っていないため、得られたデータの効果的な活用方法について検討していく必要がある。一部の生徒においては、様々な方向からの支援が必要であるため、学校全体で適切な支援をするための一つの方法として、データの効果的な活用について模索していく必要がある。

3 次年度に向けて

学校全体で効果的な支援をしていくための一つのツールとして、「ほっと」や「Q-U」などで得られたデータを効果的な活用を検討しながら、生徒個々に合わせた適切な支援体制を構築していく。本プログラムに取り組んで3年が経過し、次年度が1つの節目となる。現在実施しているプログラム内容においては一定の効果が認められているため、現行のプログラムを維持しながら、学年に応じたテーマの設定および取組内容について検討し、学校プログラムの確立を目指す。

北海道旭川東高等学校

課程：定時制
 学科：普通科
 生徒数：33名

本校の目指す生徒像

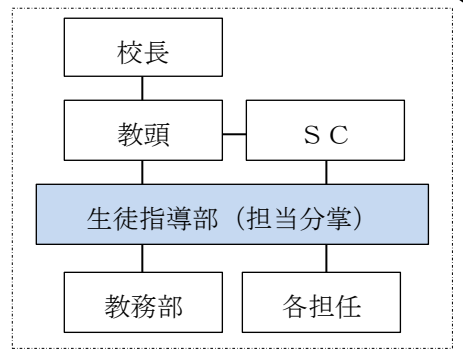
- ・基本的な生活習慣の確立に向けて、自ら努力する姿勢をもった生徒
- ・学習への意欲を高め、進路目標の実現に向けて努力する生徒
- ・心身ともに健全で、思いやりの心と感謝の気持ちで挨拶と笑顔のある生徒

本校の現状

- ・不登校傾向、発達障がい、家庭環境に課題のある生徒等、多様な課題を抱えている生徒がみられる。
- ・適切なコミュニケーションをとることが苦手な生徒もみられ、円滑な人間関係の形成に苦慮している。
- ・自己肯定感が低く、物事を否定的に捉える傾向が強い生徒もみられる。

本校の取組の特徴

- ・適切にコミュニケーションをとることが苦手な生徒が多いことから、他者との円滑な人間関係を形成する力を育成する。
- ・様々な課題を抱えている生徒の状況を把握するために、アセスメントツールの活用やスクールカウンセラー（SC）と連携を図る。
- ・心の健康や援助希求的態度の育成を図るための自殺予防教育の取組を推進する。
- ・特別支援教育や教育相談等に関する理解を深めるなど、教員の資質・能力の向上を図る。



取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月16日～19日	生徒面談週間①	○	○	○	全学年
5月15日	進路適性MBTI性格判別の実施	○			全学年
6月8日～29日	自己表現力スキルアップ：「生活体験作文」の作成		○		全学年
6月～7月	自己表現力スキルアップ：「履歴書」の作成		○		全学年
6月29日	「ほっと」①の実施				全学年
9月18日～21日	生徒面談週間②	○	○	○	全学年
11月16日	自殺予防教育「楽観的に考え直す」の実施			○	全学年
11月28日	スクールカウンセラー講話①の実施	○	○		全学年
12月3日～6日	生徒面談週間③	○	○	○	全学年
1月25日	「ほっとプラス」①の実施				全学年
2月1日	自殺予防教育「相談しやすい方法」の実施	○	○	○	全学年
2月8日	自殺予防教育「将来に目を向ける」の実施	○	○		全学年
2月8日	「ほっと」②の実施				全学年
2月13日	スクールカウンセラー講話②の実施	○	○	○	全学年
2月22日	自殺予防教育「自殺予防の知識」の実施	○	○	○	全学年
3月15日	自殺予防教育「失敗を見つめ直す」の実施	○	○		全学年
3月18日	「ほっとプラス」②の実施				全学年
9月～3月	スクールカウンセラーによる個別面談	○	○	○	全学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

(1) 旭川市生活支援課と連携したキャリア教育の実施

- ① ねらい 進路意識を高め、他者とのつながりや社会性の必要性について理解する。
- ② 対象 全生徒
- ③ 内容
 - ・「自己理解を深めよう・自分の適性を知る」
進路適性MBTI性格判別を実施し、自分の性格を理解することにより職業の適性について考えた。
 - ・「採用される履歴書を書こう」
志望動機を文章にまとめて、自分の将来像についての考えを整理することにより、自分が今後どうすべきか方向性を定めた。
 - ・「自分のライフプランとキャリアを考えよう」
人生経験や失敗談についての講話を実施した。



④ 成果

自己理解を深め、将来について考える中で、他者とのつながりを大切にし、他者と協力しながら、自己実現を果たすことが重要であることについて理解することができた。

2 自殺予防教育の取組

(1) スクールカウンセラー講話の実施

- ① ねらい 他者との衝突やストレスを軽減させるコミュニケーションの方法について理解する。
- ② 対象 全生徒
- ③ 内容
 - ・(第1回) ストレスの解消方法やSNSにおける適切なコミュニケーションの方法について学んだ。
 - ・(第2回) 望ましい人間関係を形成するためのコミュニケーションの方法について学んだ。



④ 成果

相手の気持ちを押し量ることの大切さを学ぶとともに、相談しやすい人間関係の形成の仕方について理解を深めることができた。

3 スクールカウンセラーによる支援

(1) 個別面談の実施

- ① ねらい 日常生活で困り感を抱えている生徒への早期対応及び情緒が不安定な生徒に対する定期的な支援を行う。
- ② 対象 希望生徒
- ③ 内容 面談を希望する生徒に加え、日常生活で困り感を抱えていると思われる生徒に対して教員が呼び掛け、個別面談を実施した。
- ④ 成果 感情のコントロールが苦手な生徒に対して、定期的に面談を行うことにより、精神的な安定を維持できるよう支援することができた。また、面談後、スクールカウンセラーから教員に対して助言をいただき、課題を抱える生徒への支援方法や関係機関との連携の在り方について理解することができた。

(2) 校内研修会の実施

- ① ねらい 特別支援教育や教育相談等に関する理解を深めるなど、教員の資質・能力の向上を図る。
- ② 対象 全教員
- ③ 内容 生徒理解や課題を抱える生徒に対する支援方法に関する校内研修会を行った。
- ④ 成果 対応に苦慮している生徒の情報を収集した上で研修会を実施したことにより、具体的にどのように生徒へアプローチすべきか、専門的な視点で助言をいただき、学校の教育相談体制の充実を図ることができた。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

① 生徒面談週間及び情報交換会について

- ・4月に実施した面談の対象生徒を新入生から全生徒へ拡大するとともに、面談資料を個人用ファイルに整理したことにより、生徒の状況の変化をきめ細かく把握することができた。

② 「ほっと」の結果について

- ・学校全体では、拒否と表明の項目の数値が高く、自分の嫌なことを避ける傾向にある。一方で、高校生としての自覚が高まり、遵守と率先の項目の数値の上昇が見られた。
- ・男子は、率先して物事に取り組もうとする生徒の割合が高い。
- ・女子は、人間関係が希薄なため、積極的な交流を避ける傾向にある。また、男子よりも自己肯定感が低い傾向にある。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

不登校生徒数	：平成29年度	1名	→	平成30年度	2名
中途退学者数	：平成29年度	2名	→	平成30年度	3名
いじめの認知件数	：平成29年度	0名	→	平成30年度	0名

① 不登校生徒について

要因の特定が難しく、対応に苦慮する事案が多いことから、スクールカウンセラーと連携して、家庭環境など不登校の背景にあるものに着目することにより、きめ細かな対応を行うことができた。

② 中途退学者について

生徒との個別面談や「ほっと」の結果の分析など、生徒理解を充実させたことにより、入学年度の中途退学者数を減少させることができた。

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

- ・コミュニケーションをとることが苦手な生徒が多いため、スクールカウンセラーの講話を行うことにより、ストレス解消の仕方やコミュニケーションを上手にとる方法について理解を深めることができた。
- ・コミュニケーション能力の育成を図る取組を通して、生徒同士が互いの違いを認め合い、落ち着いて学校生活を送る様子が見られるようになった。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

- ・スクールカウンセラーの活用が推進されたことにより、専門的な視点を踏まえ、教育相談体制を充実させることができた。

2 課題

① 本プログラムに係る取組については、総合的な学習の時間における講話など、全学年に対して一斉指導を行うことが多かったことから、生徒の発達段階に応じた個別指導を行うなど、工夫する必要がある。

② スクールカウンセラーによる個別面談について、面談を希望する生徒が固定化されており、日常生活で困り感を抱えている生徒に対して適切に面談が行われるようにする必要がある。

③ 自殺予防教育プログラムの活用については、読み書きなどの基礎的な学力が十分身に付いていない生徒がいることから、ワークシート等を生徒の実態に合わせた内容に改善する必要がある。

3 次年度に向けて

① 生徒に身に付けさせたい力をどの時点で育成すべきか検証を行い、生徒の発達段階に応じたプログラムとなるよう改善を図る。

② 生徒が躊躇することなくスクールカウンセラーによる個別面談を行うことができるよう、生徒への面談の呼び掛けの方法などを工夫する。

③ 自殺予防教育プログラムの活用について、本年度の成果と課題を整理し、本校生徒の実態に合った指導方法について検討し、学習指導案やワークシートの改善を図る。

北海道苫前商業高等学校

課程：全日制
 学科：商業科
 生徒数：25名

本校の目指す生徒像

校訓「自主自律」

- ・自ら考え、自ら学ぶ意欲と態度を育てる。
- ・健康で逞しい心身を育み、人間として調和のとれた生徒を育てる。
- ・地域の教育力を十分に生かしながら、望ましい勤労観や職業観を育てる。

本校の現状

生徒が基本的な生活習慣を身に付け、「学ぶ」ことの楽しさを知ることが重点的に取り組んでいる。その中で、生徒にコミュニケーション能力や、援助希求的態度といった力を身に付けさせることで少しずつ自信をもたせ、卒業後の進路実現に結び付けられるようにすることが課題である。

本校の取組の特徴

本校は親元を離れ寮生活を送っている生徒が全校生徒の約半数を占めている。家庭事情や中学校までの人間関係等の諸事情により、基本的な学習習慣や生活規律の確立、保護者からの自立等、「中学校までの生活をリセットする」ことを目標として入学をしてくる生徒が多い。寮の運営等、地域から様々な支援を受けながら生徒のサポートに取り組んでいるが、特に最近では中学校までの不登校傾向の原因が複雑化し、対応が難しい生徒が増えてきている。

本校では、遠隔システムなどICTを有効に活用したり、外部からのカウンセラーの力を借り教員の生徒理解のスキルを上げたりすることにより、生徒一人一人の日常の心の動きを把握し生徒に自己肯定感をもたせることや、問題行動の未然防止に向け個々の生徒に合った問題の解決方法を生徒とともに考えていくことを重点に、全教職員が一丸となって生徒のサポートに取り組んでいる。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月25日	「ほっと」（自己理解検査）の実施				全学年
5月11日・12日	宿泊研修（ネイパル深川）において、自殺予防プログラムの実施（相談しやすい人間関係）、仲間づくりやクラス討議等の活動	○	○	○	第1学年
5月8日～	教育相談週間「苫商トーク」（5月25日まで）	○	○	○	全学年
6月1日	「アセス」（学級満足度検査）の実施				全学年
6月27日	SCによる生徒悉皆面談の実施	○	○	○	第1学年
6月28日	SCによる生徒悉皆面談の実施	○	○	○	第1・3学年
6月28日	小平高等養護学校体育祭へのボランティア参加	○	○		第1学年
6月29日	SCによる生徒悉皆面談の実施	○	○	○	第3学年
8月20日	自殺予防プログラムの実施（相談しやすい方法）	○	○	○	第1学年
8月28日	SCによる生徒悉皆面談の実施	○	○	○	第2学年
8月30日	自殺予防プログラムの実施（相談しやすい会話の仕方）	○	○	○	第1学年
10月4日	自殺予防プログラムの実施（心身が不調な時の対応）	○	○	○	第1学年
10月18日	「ほっと」「ほっとプラス」実施				第1・2学年

10月24日・25日	札幌にて販売実習会「スマイルウインド」実施	○	○	○	第2・3学年
10月25日	町内販売実習会（苫前小学校との連携）	○	○		第1学年
10月30日	SCによる生徒悉皆面談の実施		○	○	第1学年
11月1日	「ほっと」「ほっとプラス」実施				第1学年
11月8日	SCによる生徒悉皆面談の実施		○	○	第2学年
11月8日	SCによる校内研修会の実施				教職員
11月15日	「ほっと」「ほっとプラス」実施				第2学年
11月22日	体験発表会の実施	○	○		全学年
12月6日	自殺予防プログラムの実施（自分に置き換える）	○	○		第1学年
12月7日	自殺予防プログラムの実施（失敗を見つめ直す）	○	○		第1学年
12月7日	「ほっと」「ほっとプラス」実施				第1・2学年
1月25日	「アセス」実施				第1・2学年
1月31日	自殺予防プログラムの実施（楽観的に考え直す）	○	○	○	第1学年
2月21日	自殺予防プログラムの実施（将来に目を向ける）	○	○	○	第1学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

●スクールカウンセラーによる支援「生徒悉皆面談」

① ねらい

生徒全員に対し面談を実施することで、面談に抵抗感がある生徒や、外部機関への相談が必要と考えている生徒に対して、「自分のことを話す」「できていることに目を向ける」機会とする。

② 対象

全学年実施。第1・2学年については2回実施。

③ 内容

面談に入る前に、「今の私を考えてみよう」という内容の自己理解アンケートを実施した。スケーリング尺度や、なりたい自分とできない自分、困っていること等、各生徒が自分自身を見つめ直した上で面談に臨むことで、短時間であったが、内容を絞った面談を実施することができた。

④ 成果（○成果 ●課題）

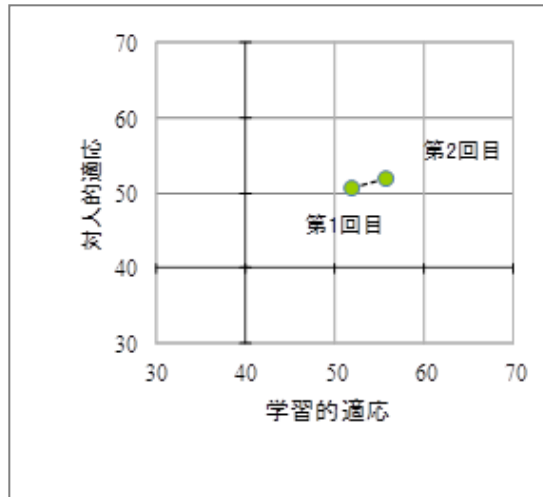
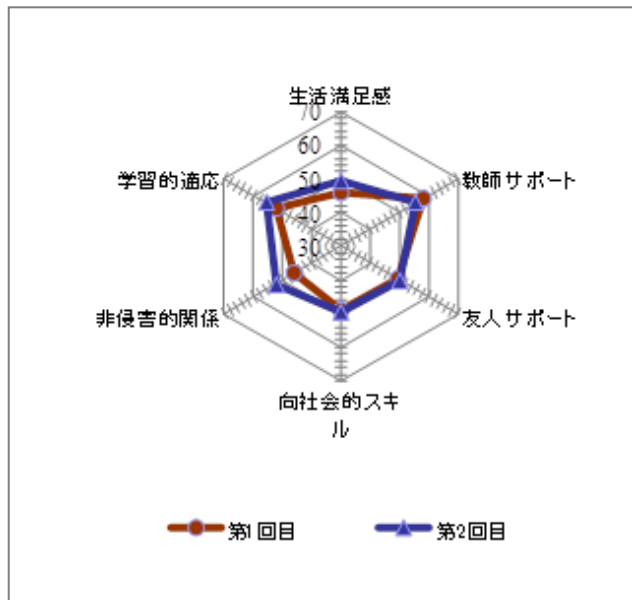
- 生徒からは面談終了後、「話を聞いてもらいうれしい気持ちになった」等の発言があり、表情が変わった生徒もいた。
- 生徒自身が大切にしている価値観について焦点化される面談であったので、その後の行動変容の動機付けとなった生徒もいた。
- 面談後の生徒の発言等により、リフレーミングする機会が多くなった。
- 登校を渋っており、面談当日も教室に入りたくない（理由は話さない）という生徒がいたが、当該生徒がSCの面談を受け、また教職員側もSCからの助言で対応の工夫をすることができ、翌日から教室に入ることができるようになった。
- 面談時間の設定や、面談の事前事後の対応の工夫を図る必要がある。
- 今後、生徒からの希望により、SCと面談する場を設定する必要がある。

次年度に向けて

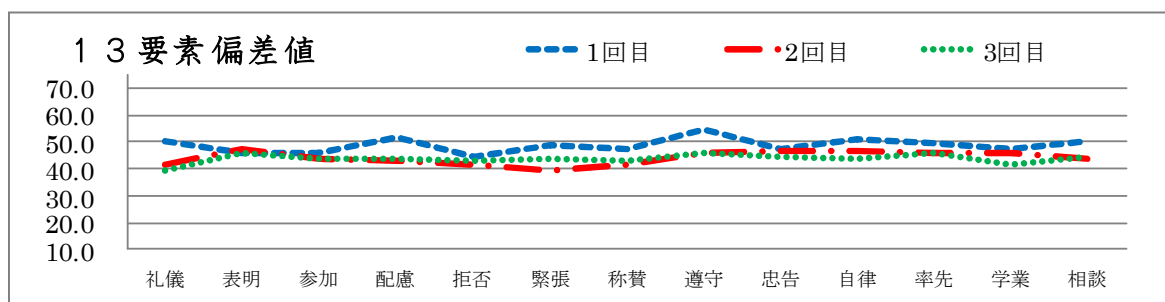
1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

- 1学年アセス結果（1回目H30. 6. 1、2回目H31. 1. 25実施）



- 1学年ほっと結果（1回目H30. 4. 25、2回目H30. 11. 1、3回目H30. 12. 7実施）



少人数ゆえに集団の傾向として読み取れる部分は少ないが、個人の結果を見ると、アセスにおいて、非侵害的關係や生活満足感の項目を中心に上昇が見られたり、学習的適応と対人的適応の偏差値の上昇が見られたりするなど、1年間の取組と成果を検証することができた。「自分の気持ちを伝える」「一人一人感じ方考え方は違う」ということを日々ホームルームや個人面談を通して取り組んできたこと、また「自分の意見を言うことができる」＝「受け止めてもらえるという雰囲気づくり」を自殺予防教育を通して取り組むことができたことが、個人の結果にそのまま表れていた。主観的に感じていることを客観的にデータとしても確認することができた。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

	H30	H29	H28	H27	H26	H25
退学	4	5	1	2	0	3
不登校	0	0	0	0	0	0

※ いじめの認知件数 1件（解消率100%）

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

入学当初は自分の思っていることが伝えられずストレスをためたり、そのことによって良好な人間関係が築けないことがあったりしたが、現在は担任に相談する前にクラスのことは自分達で話し合おうという雰囲気になっている。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

サポート委員会から年度始めの会議で説明をしている。ステップアップ・プログラムの本校における取組が3年目となり、全教職員の理解を得ることはできている。ただし、自殺予防教育については、実施該当学年の教員や授業を参観した教員は具体的に知る機会をもつことができたが、他学年の教員からは「実施した内容をもっと具体的に知りたい」という声が出された。今後、サポート委員会からの発信や実施時間の工夫が必要である。

2 課題

「心の教育」については、同じ指導案であっても、実施する側や生徒の状況によって、ねらいの達成度が変わってくる。そのことに苦手意識を抱く実施者の悩みもプログラムの実践を通して共有することができた。今後、授業公開や校内研修を通して、教職員が互いに学ぶことができる機会の確保が必要である。

3 次年度に向けて

自殺予防教育については、「心の健康教育」として、LHR年間指導計画に位置付け、各行事や進路指導の取組とも連動させる方向で進めている。昨年度課題としていた学校独自のプログラムの作成と年間指導計画への位置付けについて、今年度は年間を通して取り組み、検証することができたので、次年度は実際に取り組む中で実施者側のスキルアップの機会の設定やその内容の工夫を中心に検証を重ねていきたい。



北海道稚内高等学校

課程：定時制
 学科：普通科
 生徒数：38名

本校の目指す生徒像

- ・社会生活の規範を理解し、望ましい生活習慣を身に付けることができる生徒
- ・相互補完の精神に基づく「自立」及び社会に適応できる生徒

本校の現状

- ・義務教育段階における学習状況、生活状況に課題があった生徒もみられる。
- ・地域の学びのセーフティーネットとして、一人一人を真に大切にしたい教育を実践している。

本校の取組の特徴

- ・子ども理解支援ツール「ほっと」の活用と分析による生徒理解の推進
- ・命の尊さを学ぶ体験やコミュニケーションスキルを高めるための演習等の充実

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
5月10日	宿泊研修におけるグループエンカウターの実施 「相談しやすい人間関係の構築を目指して」 (場所：稚内少年自然の家、講師：本校教員)	○	○	○	第1学年
5月15日	科目保健における「心身の健康について」の学習		○	○	第2学年
6月5日	「ほっと」の実施（第1回）				全学年
6月13日	自殺予防プログラムの実施「命の授業」 (場所：本校、講師：助産師)	○			全学年
7月4日	地域の祭典における町内会と連携したボランティア活動	○	○		全学年
7月20日	校内生活体験発表会	○		○	全学年
9月25日	「ほっと」の実施（第2回）				全学年
10月12日	自殺予防プログラムの実施 「豊かな人間関係を築くためのスキルトレーニング」 (場所：本校、講師：大学教授)	○	○	○	全学年
11月7日	科目保健における「心身の健康について」の学習		○	○	第1学年
12月7日	自殺予防プログラムの実施「アンガーマネジメント講習会」 (場所：本校、講師：外部専門家SC資格者)	○	○		全学年
1月28日	「ほっと」の実施（第3回）				全学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

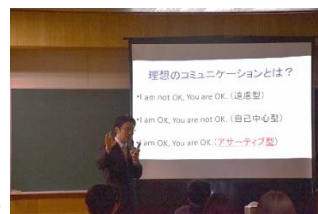
○ 豊かな人間関係を築くためのスキルトレーニングの実施

(1) ねらい

相手の想いを受容しつつ、自分の想いも相手に伝えることができるようになることを目指し、理想的なコミュニケーションの在り方を考えコミュニケーションスキルを向上させる。

(2) 内容

平成30年10月、心理学の大学教授を講師として講話を実施した。他校の定時制における映画制作の取組を紹介いただき、一人一人がそれぞれ役割を担い実行し、映画が完成する様子を紹介いただいた。その後、理想の人間関係とはどのようなものかを生徒に考えさせ、相手の想いを受容しつつ、自分の想いを相手に伝える「アサーティブ型」のコミュニケーションはどのようにするべきかについて意見を出し合った。



(3) 成果

本取組により、生徒は、一つの目的に対し、それぞれが強みを発揮して役割をやりきることで自己肯定感を高められることに気付くことができた。また、相手の話をしっかり聴き、受け止めることの大切さを理解し、「アサーティブ型」のコミュニケーションを実践しようとする様子が見られるようになった。

2 自殺予防教育の取組

○ 「命の授業」の実施

(1) ねらい

体験的活動を通して、命が生まれる尊さに触れ、健康的な生活を送ることの大事さや性について深く考える機会とし、他者を大切にすることを育む。

(2) 内容

平成30年6月、助産師を講師として実施した。妊娠から出産までの心と体の変化や、無事に出産に至るためには、パートナーや周囲の協力が欠かせないことなどを、映像等を活用ながら学習した。

続いて8月に「赤ちゃんふれあい体験」の事前体験学習を実施した。人形を使い、赤ちゃんの抱っこの仕方やおむつ換え、また絵本の読み聞かせの仕方についても体験した。



(3) 成果

本取組により、生徒は、誰もがあらゆる困難を経て命を得たことを改めて理解し、自分の命も他者の命も尊いことを心に刻み、自分を大切にすること、他者を大切にすることの大切さを感じることができた。

3 スクールカウンセラーによる支援

○ 「アンガーマネジメント講習会」の実施

(1) ねらい

よりよく、豊かな人間関係を形成し、円滑な社会生活を送るために、自己の心情を適切にコントロールしながら他者に向き合うためのコミュニケーションスキルを向上させる。

(2) 内容

平成30年12月、専門家を講師として、「イライラをせず、落ち込みをせず、豊かな人間関係を形成する」をテーマとした「アンガーマネジメント講習会」を実施した。ワークショップにより怒りのメカニズムやタイプとその対処法などについて学んだあと、生徒は、イライラへの対処法について、4つの観点から分類して書き出し、どんな方法があるかを議論した。

(3) 成果

本取組により、「怒りの感情をため込まずにこまめに相手へ伝える」ことや「深呼吸して怒りのピークをやり過ごす」方法などを試してみたいという生徒の声が聞かれ、円滑な社会生活を送るために必要な、他者を大切にすることを育むことができた。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

本校生徒については「コミュニケーションスキル」の13要素の偏差値は全体的に低い、その中でも「参加」「称賛」「相談」の偏差値が特に低い。このことから、他者を尊重すること、仲間と協調すること、相手を信じ自己開示することなどの要素が低いと考える。その原因として、生徒の自己肯定感が低いことや、自己分析が適切にできていないことから、自己の価値を十分認めていないことが考えられる。

6月と1月に実施した「ほっと」の結果を比較したところ、1～3学年においては、13要素の数値に有意な上昇は見られなかったものの、4学年においては、約半分の要素において上昇した。

このことから、本プログラムによる取組の成果が、本校生徒のコミュニケーションスキルや自己肯定感などを即効的に高める結果とはなっていないが、今後、生徒の発達段階が進むことで緩やかに効果が表れることが期待できると考えられるため、今後においても、より充実させた繰り返し取組が必要である。

また、因子別偏差値は2～4学年において、有意な上昇が見られ、発達段階が進むにつれて人間関係形成能力が高まっていると考えられる。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

これらの生徒数等は次のとおりである。なお、例年と有意な違いは見られない。

- ・不登校生徒数 2名
- ・中途退学者数 1名
- ・いじめの認知件数 4件（解消率100%）

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

今年度末の生徒アンケートにおいては、「定時制に入学して良かったと思う」また「定時制の行事は楽しくて充実していると思う」について、肯定的な回答が増加した。このことから、本プログラム等による取組が、学校生活の満足度を高めることにつながっていると考えられる。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

これまでも本校においては、生徒一人一人に細かく対応した教育相談や、将来に円滑な人間関係を築くことができることを目指した教育活動を推進してきた。本プログラムにより外部専門家を効果的に活用することができ、教員の指導力や教育相談の技量の向上にも役立った。

2 課題

(1) 生徒が、学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等を緩やかでありながらも継続的に高めることができるよう取組の充実が必要である。

(2) 生徒自身がコミュニケーションスキルや人間関係形成能力などが高まったことを実感できる取組が必要である。

3 次年度に向けて

(1) 本年度実施した取組は、次年度も継続するとともに、内容の充実を図り、生徒の内面の変化をより促すことができることを目指す。そのため、生徒の実態を的確に把握するための教育相談及び「ほっと」を年度当初から複数回実施する。

(2) 生徒に具体的に行動させるため、生徒が自分の思いや考えを表現し、また、他者の思いや考えを受け止められる機会を充実し、生徒に達成感や自己肯定感をもたせ、自身の能力の変化に気付かせる取組を実施する。

北海道網走桂陽高等学校

課程：全日制

学科：普通・商業・事務情報

生徒数：427名

本校の目指す生徒像

- ・社会の一員として責任を果たす生徒
- ・学ぶことを使命とし知徳を磨く生徒
- ・品格があり豊かな人間性を培う生徒
- ・心身とも健康で自ら鍛錬に励む生徒

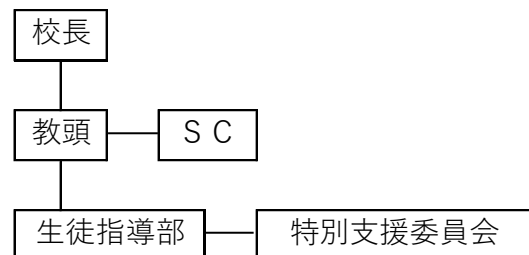
本校の現状

- ・普通科と商業科の併置校
- ・多様な進路希望(進学 60%、就職 40%)
- ・資格取得の推奨
- ・全生徒が青少年赤十字に加入

本校の取組の特徴

教育相談的な支援・指導を基調に、生徒理解の深化による個性の伸長と自己実現を進めるとともに、望ましい生活態度や人間関係の育成を図る。

毎月第一月曜日を「桂陽安全安心の日」とし、安全安心な学校づくりを目指す。



取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月23日～25日	宿泊研修におけるコミュニケーション能力の育成	○	○		1年
通年	毎月桂陽安全安心の日、援助希求的態度の育成を図るための集団カウンセリング等の実施	○	○	○	全学年
6月・7月 10月・12月	「Q-U」及び「ほっとプラス」検査による検証及び研修の実施				全学年
通年	定期的なスクールカウンセラーによるカウンセリングの実施	○	○		全学年
通年	自殺予防教育プログラムの実施	○	○	○	全学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

生徒会活動やボランティア活動及び校外での学習を推進し、地域住民等とのコミュニケーションの機会を多く設定した。

2 自殺予防教育の取組

自殺予防教育プログラムを活用し、教科において、「命の大切さを学ぶ授業」を実践した。ストレス対処能力育成授業の取組により、「ほっとプラス」における「失敗を見つめ直す力」が弱いと答えた生徒が全体の20%から10%へと減少した。

3 スクールカウンセラーによる支援

- ・4月より月1回のペースでカウンセリングの日を設定し、希望生徒に対応した。
- ・今年度の生徒の利用はのべ15名、保護者及び教員に適切なアドバイスを行った。
- ・教員を対象にカウンセリング方法の校内研修を実施した。

次年度に向けて

1 成果の検証

- (1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）
 - ・1年生は入学時の不安な状況、2年生はクラス替えからの不安な状況が見られたが、クラスでの様々な取組を経て、新たな人間関係を構築する姿が見られた。
 - ・「Q-U」の結果から「学級生活不満足群」の要支援生徒数（1・2年生）が12名から5名へ減少した。
- (2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率
 - ・平成29年度は中途退学者が2名であったが、平成30年度は0名となっている。
 - ・今年度のいじめの認知件数は4名であったが、迅速に対応し全て解消した。解消率は100%である。
- (3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容
 - ・各種学校行事等において、クラス内でのコミュニケーションを円滑に図りながら、作業に取り組む姿が見られた。
 - ・校外での活動から達成感を得ることにより、学習意欲の高まりが見られた。
 - ・3年生の進路決定や各学年の検定資格取得への取組において、生徒間で協力する姿が見られた。
 - ・日常生活を振り返り、SNSなどの問題について、生徒会が中心となって課題解決に取り組む姿勢が見られた。
- (4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況
 - ・生徒指導部を中心に教科との連絡を図ることで、効率的にプログラムを推進する。運営会議には、各学年主任も参加し、学年経営へのプログラムの活用を図った。
 - ・スクールカウンセラーによる校内研修を実施し、個々の事例等から適切な対応について学んだ。

2 課題

入学後、早期の人間関係の構築を目指し、コミュニケーション能力の育成に取り組んできたが、継続的な指導が必要であることから、各学年のスタート時でも、同様の取組を検討する必要がある。

3 次年度に向けて

- (1) 「Q-U」及び「ほっとプラス」から得た情報を活用し、一人一人の生徒に適切な支援を行うための計画的な取組を実施する。
- (2) 同世代以外とのコミュニケーション能力を育成するために、ボランティア活動及び地域イベントへの参加を促進していく。



北海道興部高等学校

課程：全日制
 学科：普通科
 生徒数：88名

本校の目指す生徒像

広い視野及び豊かな知識をもつとともに、他を思いやる温かい心及び社会性と自己形成力も身に付け、目標に向かって着実に取り組む生徒。

本校の現状

学業や人間関係の面などで不安を抱えながら学校生活を過ごしている生徒がみられることから、コミュニケーション能力を育成する必要がある。

本校の取組の特徴

小規模校である本校では、3年間クラス編成に変わりがないので、人間関係で問題が起きてしまうと長期化してしまう危険性がある。そこで、特に1年生においてコミュニケーション能力を育成するプログラム及び良好な人間関係を形成するためのプログラムを多く取り入れている。また、教員のカウンセリング能力向上のための研修会も実施している。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月15日	コミュニケーション能力向上トレーニング	○	○	○	1学年
4月16日	いじめ未然防止プログラム		○	○	1学年
6月21日	「hyper-QU」実施				全学年
7月11日	「ほっとプラス」実施				1学年
7月20日	自殺予防プログラムの実施(援助希求的態度の育成)	○		○	2学年
7月20日	自殺予防プログラムの実施(ストレス対処能力の育成)	○			2学年
8月24日	スクールカウンセラーによる集団カウンセリング	○	○	○	全学年
10月4日	「hyper-QU」実施				全学年
10月18日	自殺予防プログラムの実施(ストレス対処能力の育成)		○		1学年
10月25日	自殺予防プログラムの実施(ストレス対処能力の育成)	○	○		1学年
12月20日	自殺予防プログラムの実施(ストレス対処能力の育成)		○	○	1学年
1月16日	「ほっとプラス」実施				1学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

1学年宿泊研修時に、ネイパル北見職員を講師として、コミュニケーション能力向上トレーニングを実施した。内容としては、入学して間もなく全員がコミュニケーションを図ることを目的として、アイスブレイクを中心に、言葉だけでなく、ボディランゲージを使いコミュニケーションを図るゲームなどを行った。生徒も最初は緊張した様子があったが、積極的に取り組んでいた。入学して間もない時期に実施できたことで、クラスにおける新たな人間関係の構築に成果があった。

2 自殺予防教育の取組

自殺予防教育プログラムの実施については、特別活動の中での実施によるものが多くなったが、いつも担任及び学年団からの指導では、生徒の受け止め方も固定化してしまう可能性があった。そこで、プログラムの一部を保健の授業の中で実施し、教科書と関連させながら指導を行った。ストレスの対処法は、誰にとっても重要であるが、物事を楽観的に考え直すためのレポーターを学ぶことなどで、自分を追い詰めないことを理解した。

3 スクールカウンセラーによる支援

スクールカウンセラーからは、定期的に生徒や保護者に対するカウンセリングや教員に対する指導助言などで様々な支援を受けている。それに加えて、全校生徒を対象とした集団カウンセリングを実施した。この取組のねらいは、「命の大切さや自殺予防に関する知識を身に付けさせる」ことである。スクールカウンセラーから「心の健康」の大切さや不調などときの援助の求め方、ストレス対処の方法などについて具体例を交えながら話していただいた。生徒の感想では、「一人ひとりのかけがえのなさ、命の大切さについて再確認できた。」「周りでお互いに支え合っていくことが大切だと実感した。」といった感想が寄せられた。

本校は、今年度新規に指定を受けた関係で、年間計画の作成やスクールカウンセラーとの日程調整が遅れてしまったため実施時期が遅くなってしまったが、他のプログラムとの関連を含めて実施時期について検討していく必要がある。



次年度に向けて

1 成果の検証

- (1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）
「ほっと」の結果から、本校の特徴として、偏差値50前後の項目が多い状況であるが、ルールやモラルの項目に関して、全道平均より高く規範意識の向上が見られた。
- (2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率
不登校生徒数及び中途退学者数については、前年度より減少した。いじめの認知については、前年度・今年度ともに該当なしである。
- (3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容
友人関係のトラブルが発生した時でも、相手の立場で考えることができる生徒が増加した。また、友人や教員に対しても、自分の思いや状況を気軽に相談するようになった。
- (4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況
生徒指導部を中心としてプログラムを実施し、教員内の理解も深化した。「QU」等の分析会も実施し、きめ細かな生徒理解を実現した。

2 課題

プログラムの実施にあたり、教科や特別活動との関連を明確にするとともに、外部人材の活用を一層図っていく必要がある。

3 次年度に向けて

外部人材及びスクールカウンセラーを効果的に活用するために、年間計画を早期に作成し、プログラムの円滑な実施を図る。

北海道本別高等学校

課程：全日制
 学科：普通科
 生徒数：100名

本校の目指す生徒像

社会で自立できる生徒
 (公的資質・職業観・勤労観)

本校の現状

落ち着いた学校生活を送ることができているが、コミュニケーションスキルや人間関係の構築に課題を抱える生徒もみられる。

本校の取組の特徴

- ・スクールカウンセラーと連携した、生徒の困難さへの個別的な対応
- ・コミュニケーションスキルの向上に向けた、集団カウンセリングの検討的な実施
- ・援助希求的態度の育成を目指す、自殺予防教育プログラムの実施
- ・全校面談の実施や「hyper-QU」の活用による、きめ細かな生徒理解と生徒指導

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月17日	自殺予防教育プログラム (A1/3) 「仲間づくり」	○		○	1 学年
4月25日	自殺予防教育プログラム (C1/4) 「リフレミング」			○	2 学年
5月	hyper-QU の実施	△	△	△	全学年
5月11日	スクールカウンセラーによる自殺予防教育プログラム (B1/2) 「ストレスマネジメント」	○		○	1,2 学年
5月31日	集団カウンセリング「アサーション」		○		1 学年
6月7日	外部講師 (大学教授) による共生社会教育「障がいについて知っていますか？」	○			1,2 学年
6月	自殺予防教育プログラム (A2/3) 「全校面談」	○		○	全学年
7月18日	自殺予防教育プログラム (B2/2) 「体と心と危機管理」			○	1 学年
8月	「ほっとプラス」の実施	△	△	△	2 学年
8月22日	自殺予防教育プログラム (C2/4) 「将来に目を向ける」		○	○	2 学年
9月11日	スクールカウンセラーによる校内研修「hyper-QU を活用した生徒理解について」	△	△	△	教職員
9月27日	自殺予防教育プログラム (C3/4) 「自分に置き換える」	○		○	2 学年
10月3日	自殺予防教育プログラム (C4/4) 「失敗を見つめ直す」			○	2 学年
10月30日	自殺予防教育プログラム (A3/3) 「相談しやすい会話の仕方」	○		○	
10月	hyper-QU の実施	△	△	△	全学年
11月12日	連携校の小学生及び JICA 研修生との交流		○		3 学年
12月	自殺予防教育プログラム (A2/3) 「全校面談」	○		○	1,2 学年
1月28日	スクールカウンセラーによる個別カウンセリング			○	希望者
3月13日	スクールカウンセラーによる個別カウンセリング			○	希望者

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

○自殺予防教育プログラム（援助希求的態度の育成 1／3）「仲間づくり」

① ねらい

相手の話をよく聞いた上で、心があたたかくなる言葉を使うなど、相談しやすい人間関係を形成する力を身に付ける。

② 対象

1 学年

③ 内容

「他己紹介」

自己紹介カードを作成する。
(好きなスポーツ、趣味などいくつかの項目がある)

二人一組になり、名前と自己紹介カードの項目のうち、一つを選んで自己紹介をする。

別のペアとグループになり、自分のペアをグループのメンバーに紹介する。最後に「教えてくれてありがとう」と伝える。その後ペアを替えて、これを繰り返す。



【他己紹介の実践】



④ 成果

【生徒のリフレクションより】

- ・みんなが思ったよりも優しくて、楽しく話すことができた。
- ・相手の意外な特技や自分と趣味が合う人など、いろいろな発見があつてよかった。

【教員の評価より】

- ・実施後、休み時間等でも生徒同士の関わり合いが増えた。「仲間づくり」のきっかけとしては効果があった。

2 自殺予防教育の取組

○自殺予防教育プログラム（援助希求的態度の育成 2／3）「全校面談」

① ねらい

相談をすることのメリット（問題解決に役立つ等）を実感するとともに、相談しやすい方法について考える。

② 対象

全学年

③ 内容

10分程度の面談を実施し、「学校生活を点数で表すと?」「頑張っていることは?」「困っていることはある?」等について話をする。
※生徒に「話せた」「聞いてもらえた」と実感させ、「困ったことがあれば相談してみようかな」と感じさせることを目標とする。

面談終了後、相談することのメリットとデメリットをワークシートに記入する。

④ 成果

「話しやすかった」「聞いてもらえて楽しかった」「相談ができてよかった」「話すことで自分の考えがまとまった」等の好意的な評価をした生徒の割合が、6月実施時には60%であったが、12月実施時には80%に上昇した。

評価が上がった理由として、一度経験したことで面談に見通しをもつことができ、安心して話せる生徒が増えたことが考えられる。

⑤ 課題

10%ほどの生徒が「意味がない」「やりたくない」等の記述があり、全校面談の目的をより分かりやすく生徒に伝えていく必要がある。

3 スクールカウンセラーによる支援

○自殺予防教育プログラム（早期の問題認識（心の健康） 1/2）「ストレスマネジメント」

- ① ねらい
心の危機のサインを知り、心身が不調なときの対応を考える。
- ② 対象
1・2 学年
- ③ 内容

ストレスとは誰もが日常的に抱えていることを理解するとともに、心身に表れるストレスサインを知り、ストレスとの上手な付き合い方や解消法を知る。

- ④ 成果

【生徒のリフレクションより】

- ・ストレスはなくそうとせず、向き合い方が重要ということが分かった。
- ・青年期にいろいろな悩み事があるのは普通で、多くの高校生が悩みを抱えていると知ることができて安心した。

【教員の評価より】

- ・ストレスは誰にでもあり特別なことではないということや、上手に付き合っていくことが必要だということが生徒にしっかり伝わっていた。



【スクールカウンセラーの講義】



【リラックス呼吸法の実践】

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

hyper-QU の結果によると、学級環境適応感、学級満足度はどの学年も比較的高い数値になっているが、一定数の不満足群がいる。「hyper-QU を活用した生徒理解」に関する校内研修を参考に、面談の強化等を行うことで学級満足度の上昇が見られた。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

1名の生徒が人間関係の悩みや不安感から欠席が多くなったものの、学年団を中心とした支援や、スクールカウンセラーによるカウンセリングを3回行い、改善が図られた。

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

本プログラムの取組に加え、授業における協働的な学習活動を通して、主体的に活動する姿や困っている生徒に手を差し伸べる姿が見られるようになるなど、生徒のコミュニケーション能力が向上した。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

全教職員で共通理解を図りながら全校面談や校内研修を実施している。コミュニケーションスキルの学習は、現在特定の教員が指導しているが、今後は全ての教職員が指導できるよう研修を行うこととしている。

2 課題

継続して取り組んできたコミュニケーションスキルの学習と自殺予防教育プログラムを組み合わせて実施した。題材は系統立てて計画できているが、年度の前半に集中してしまったため、実施時期を年間通してバランスよく設定するなどの工夫が必要である。

3 次年度に向けて

本プログラムでの学びを生徒が継続的に意識できるよう、以下の2点に取り組む。

- ・コミュニケーションスキルの学習を、朝のSHR前の10分程度で行う「短時間プログラム」の開発
- ・本プログラムの取組を生徒が振り返ることができる通信の発行

北海道標茶高等学校

課程：全日制
 学科：総合学科
 生徒数：223名

本校の目指す生徒像

- ・主体的で協働的な探究により地域社会の発展に資する生徒
- ・自己実現を目指すことのできる生徒
- ・生命を尊び、多様性を認め合い、豊かな人間性をもった生徒

本校の現状

特別な支援を要する生徒、家庭事情等で情緒が安定しない生徒など様々な方面で支援を要する生徒や自分の気持ちを伝えることに困難を抱え、大きなストレスから体調を崩す生徒もみられる。

本校の取組の特徴

- ・SCとの連携による生徒の困り感への対応及び集団カウンセリングによるストレス対処スキルの育成
- ・ピア・サポート活動や外部講師の講座による生徒のコミュニケーションスキルや自己肯定感の向上と良好な人間関係の構築及び援助希求的態度の育成
- ・「ほっと」の活用と教育相談によるきめ細かな生徒理解を踏まえた早期の問題認識（心の健康）及び生徒対応

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月16日・17日	自殺予防プログラムの実施（ストレス対処能力の育成 1/4 時間）	○		○	1年次
4月18日	宿泊研修時における仲間づくり支援	○			1年次
4月23日・24日	自殺予防プログラムの実施（ストレス対処能力の育成 2/4 時間）	○		○	1年次
4月27日	「ほっと」の実施				全年次
5月8～18日	教育相談週間（第一期）			○	全年次
5月14日・15日	自殺予防プログラムの実施（ストレス対処能力の育成 3/4 時間）	○		○	1年次
5月14日	ピア・サポート講座	○	○		希望者
5月18日・19日	自殺予防プログラムの実施（ストレス対処能力の育成 4/4 時間）	○		○	1年次
5月24日	釧路養護学校交流学习会（花の苗植え等）		○		希望者
6月11日	LINE株式会社によるLINE安心安全教室	○	○	○	全年次
6月18日	ピア・サポート講座	○	○		希望者
7月20日	自殺予防プログラムの実施（早期の問題認識 1/2） ～人権擁護委員による人権講座～	○	○	○	全年次
8月27日	「ほっと」の実施				全年次
9月10日	ピア・サポート講座	○	○		希望者
9月12日	自殺予防プログラムの実施（早期の問題認識 2/2） ～警察署による命の大切さを学ぶ教室～	○		○	全年次
9月12日～	教育相談週間（第二期）			○	全年次
9月21日	釧路養護学校交流学习会（野菜収穫等）		○		希望者
10月15日	ピア・サポート講座	○	○		希望者
11月6日	ピア・サポート講座	○	○		1年次
11月19日	ピア・サポート講座	○	○		希望者

12月17日	ピア・サポート講座	○	○		希望者
1月28日	ピア・サポート講座	○	○		希望者
2月19日	★「ほっと」の実施				2・3年次
2月25日	★ピア・サポート講座	○	○		希望者
2月25日～	★教育相談週間（第三期）			○	2・3年次
2月26日	★SCによる心の健康についての講義（ストレスマネジメント）	○	○	○	1年次

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

(1)ピア・サポート活動の取組

① ねらい

- ・様々な支援スキルの演習を通して、互いに思いやる気持ちを持ち、それを実践する雰囲気をつくり、豊かな人間関係を構築できるようにする。
- ・講座を受けたピア・サポーターが他の生徒に対し支援をすることで自己肯定感やコミュニケーション能力の向上を目指す。

② 対象 全年次希望者

③ 内容

- ・SC宮尾賢子氏の協力のもと、放課後、ピア・サポート養成講座を実施。
- ・講座を受けた生徒による他生徒へのピア・サポート活動。

④ 成果

講座後に記入するスケーリング評価では、「活動がためになったか」という問いに対し、毎回10点満点中8.7点以上の評価で「今回の気づきを活かし、少しずつでも日常生活に取り入れたい。」という感想をもつ生徒が多くみられた。日常生活の様子からも、素敵な聴き方、ノンバーバル、アサーティブな会話など、演習したことを意識しながら会話をする姿が見られる。また、3年次生の中には、進学・就職面接の中でピア・サポート活動で身に付けたコミュニケーション能力について話す生徒もおり、地道に継続してきた取組が、生徒や教員の中に定着してきていることがうかがえる。「たくさんの人にこの講座を受けてもらいたい」という生徒の感想も聞かれるので、今後は全員にこの講座を受ける機会を設けたい。



「すてきな頼み方」のロールプレイ



アサーティブな答え方をシェアリング

2 自殺予防教育の取組

(1) 外部講師の活用

① ねらい

- ・命の大切さ、一人一人が大切なかけがえのない存在、対等な関係であることを理解させる。
- ・孤独感が高まる前に対応できること（ストレス対処、援助希求、仲間への援助志向）を知る。

② 対象 全年次

③ 内容

- ・LINE安心安全教室 ～LINEオフィシャルインストラクター 櫻井慶子氏による講義～コミュニケーションの基本やインターネットの特徴、インターネットでのコミュニケーションがいかに誤解を生じやすいかについて理解を深める。
- ・人権講座 ～法務省人権擁護委員釧路人権擁護委員協議会 津田鉄子氏による講義～いじめやデートDVを例にあげ、相手を尊重する関係とはどのようなものかを考え、誰しもが大切でかけがえのない存在であることを理解する。
- ・命の大切さを学ぶ教室～北海道警察弟子屈警察課長 伊藤氏による講義～いじめで亡くなった遺族の方の苦しみがどれだけのものか、また、心身の不調の時にはどうすればよいかを知る。

④ 成果

外部講師を招いての講座は専門的な内容や事例を交えての話で、生徒の感想からも「具体的で分かりやすかった。」などの感想が聞かれた。講師からの質問に生徒が答えたり手を挙げたりしながらの生徒参加型講義で、生徒は自分のこととして捉えることができた。

生徒から「相手と自分の『あたりまえ』や考え方、捉え方等は全然違うということに改めて実感した」「自分のことのみではなく相手のことも考えながらコミュニケーションをとることが大切だと理解できた。」という感想が見られるなど、人には多様性があるということを知り、自己、他者理解を深める機会となった。また、命の尊さを理解するとともに、どの講義においても「一人で抱え込まず、誰かに相談することが大事」という話があり、相談窓口等の紹介もあった。講義後、「これからは誰かに相談する。」という感想が多く見られ、援助希求的態度が高まった。



LINE安心安全教室の様子

3 スクールカウンセラーによる支援

(1) スクールカウンセラーによる心の健康教育（ストレスマネジメント）

① ねらい

ストレス場面で、出来事を楽天的に考え直し、肯定的な意味付けをしようとする考え方や将来を明るく展望する考え方、原因を見直す考え方、取り返しがつかないなどの決めつけを緩和する考え方を身に付ける。

② 対象 1年次

③ 内容

- ・自分の生活を振り返り、思考の傾向を知る。
- ・出来事があった時の思考がその後の気持ちと行動につながる事を知る。
- ・ストレス場面で出来事を楽天的に考え直し肯定的な意味付けをしようとする考え方を学ぶ。
- ・ストレスを軽減するための方法を知る。

④ 成果

生徒の実態からどのような授業展開がよいか助言を頂いたり、困り感をもつ生徒のカウンセリングを通じて悩みの解消につなげたりすることができた。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

「ほっと」の結果から、どの年次においても、礼儀、遵守の値が比較的高く、緊張、忠告、表明の値が比較的低い傾向にあることが分かった。前年度と比較してみると、相談の値が昨年度より高くなっており、援助希求的態度が身に付いてきていることがうかがえる。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

・中途退学者	：平成29年度	6名	→	平成30年度	0名
・不登校生徒数	：平成29年度	7名	→	平成30年度	2名
・いじめ認知件数	：平成29年度	2名	→	平成30年度	0名
・保健室相談件数	：平成29年度	219名	→	平成30年度	230名

今年度、中途退学者が0件である。不登校生徒も減少傾向にある。保健室での相談件数は増加傾向にある。援助希求的態度が高まり、早い段階で問題に対応できた結果と考える。

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

- ・地域連携や異校種と連携した行事やボランティア活動において、ピア・サポート講座などで身に付けたコミュニケーションスキルを活かし、他者と積極的に関わる生徒が増えている。
- ・ピア・サポート活動を通して、生徒の良好な人間関係が構築されている。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

今年度は特に援助希求的態度の育成に力を入れ、年3回設けている教育相談週間においても、教員は生徒の声や訴えによく耳を傾け、生徒が相談しやすい環境を作るよう意識した。教育相談週間以外でも相談したいという希望が多くみられ、教員はその都度時間をとって、しっかり生徒の話に傾聴している。

2 課題

- ・放課後に希望者を対象として行っているピア・サポート講座への参加については、時間の都合が合わず、継続して参加できる生徒が少なく、例年行っていたピア・サポーターによる他生徒への授業が今年度はできなかったことから、実施時間等について工夫をする必要がある。
- ・援助希求的態度が高まった事はよい傾向にあるが、相談件数が多く相談時間も長いため、教員の負担が大きい。一人の教員が抱え込むことなく、教員間やSC、外部機関との連携を更に密にし、学校全体で支え合っていく環境整備が必要である。

3 次年度に向けて

- ・ピア・サポート講座等を希望者のみならず、全校生徒を対象に行う機会を設ける。
- ・SCによる心の健康教育を年度の早い段階で実施する。
- ・「ほっと」のみならず、「ほっとプラス」での検証を行っていく。
- ・本プログラムに対する教員の理解を深めるため教員研修を実施する。

北海道弟子屈高等学校

課程：全日制
 学科：普通科
 生徒数：104名

本校の目指す生徒像

- ・郷土を愛し、たくましく生きる生徒
- ・自ら学ぶ意欲をもち続ける生徒
- ・自他の生命を尊重し、互いに思いやり、高め合うことのできる生徒

本校の現状

- ・中学校の時に特別な支援を受けていた生徒、不登校だった生徒、人間関係で困難を抱えて入学する生徒が年々増えている。
- ・気持ちが優しく素直な生徒が多い反面、自己肯定感が低く、ストレス耐性が低い生徒もみられる。

本校の取組の特徴

教育相談活動の充実

- ・教育相談委員会を定期的に関き、生徒の情報交換、サポートについて検討を行う。
- ・スクールカウンセラーによる個別カウンセリング、全教員による全校生徒を対象とした教育相談活動を実施する。
- ・スクールカウンセラーによる心の教育、集団カウンセリングの実施。(各学年)
- ・ケース会議の実施（SC、担任、養護教諭）

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月23日	宿泊研修での集団カウンセリング実施 (場所：ネイパル北見 講師：ネイパル北見職員 今村信仁 氏)	○			1学年
5月31日	Q-Uの実施				全学年
6月5日	SCによるコミュニケーショントレーニング 実施 (SC：安川禎亮氏)	○	○		3学年
6月13日～7月6日	全校面談			○	全学年
6月22日	中学生との交流 (みんなの弟高デー)	○	○		2学年
6月25日	幼稚園園児、小学生及び中学生との交流 (フラワータッチ)	○	○		全学年
7月4日	SCによるコミュニケーショントレーニング 実施 (SC：堀井恵利香氏)	○			2学年
8月30日	SCによるコミュニケーショントレーニング 実施 (SC：安川禎亮氏)			○	3学年
10月31日	SCによるコミュニケーショントレーニング 実施 (SC：堀井恵利香氏)		○	○	1・2 学年
12月21日	「ほっと」及び「ほっとプラス」の実施				全学年
1月21日～2月15日	全校面談			○	全学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

各学年2時間ずつのLHRを使い、メンタルヘルスの基礎づくりを目的としたSCを講師とするコミュニケーショントレーニングの取組を今年度から始めた。

2 自殺予防教育の取組

保健体育を中心に心の健康についての授業を実施した。また、援助希求的態度やストレス対処能力の育成を図るコミュニケーショントレーニングを実施した。

3 スクールカウンセラーによる支援

今年度は3名のSCによる支援体制を組み、生徒や保護者向けの個別カウンセリングを実施した。また、困り感を抱える生徒についてのケース会議を開き、サポートの方向性について話し合ったり、助言を受けたりした。年に2回、2名のSC及び、担任、養護教諭でのケース会議を実施し、生徒情報を共有したり、支援の進め方を確認したりする場を設けた。また、SCと連携したコミュニケーショントレーニングを実施した。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

昨年度に比べて「遵守」、「忠告」、「相談」の項目の数値が上昇したことで、4因子の得点バランスが改善され、全体的な数値も上昇していることから、今年度から取り組んだコミュニケーショントレーニングの効果があったと考えられる。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

- ・不登校生徒数：平成28年度1名、平成29年度0名、平成30年度1名
- ・中途退学者：平成28年度0名、平成29年度0名、平成30年度0名
- ・いじめ認知件数：平成28年度1件、平成29年度0件、平成30年度0件

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

コミュニケーショントレーニングにおいては、周りへの働きかけが苦手な生徒も見られたが、生徒はお互いに新たな一面を知ることができ、自己理解や他者理解、集団づくりに効果があったと考える。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

生徒が安心して学校生活を送るため、昨年度から事業を活用し、教育相談体制づくりを進めてきた。教育相談の必要性が浸透し、全教職員で協力して取り組んでいる状況である。

2 課題

- ・昨年度及び今年度の「ほっと」の結果を見ると、統計的なデータにおける平均値に近い値となっているが、個別の結果を分析すると合計点が高い生徒群と低い生徒群に二極化している傾向が見られる。生徒が安心してコミュニケーションをとることができる環境づくりを継続し、合計点が低い生徒群の状況改善に向けた取組が必要である。
- ・コミュニケーショントレーニングの実施については時間数が限られているため、身に付けさせたい力を明確にした上で3年間を見通した計画を立て、他教科と連携しながら進めていくなど工夫が必要である。

3 次年度に向けて

一つ一つの内容は目新しいものではないが、活動の目的を明確にし、3年間を通して取組を継続することが生徒の気付きや人間関係形成能力等の育成につながると考える。生徒に自分が大切にされているという実感をもたせるとともに、他者を大切にす気持ち育てる取組を学校全体で継続していく。

北海道白糠高等学校

課程：全日制
 学科：普通科
 生徒数：104名

本校の目指す生徒像

- ・自ら考え、実行する生徒であれ
- ・どんなことにも、精一杯立ち向かう生徒であれ
- ・心身ともに健康でたくましい生徒であれ
- ・豊かな心を持ち、物事に感動する生徒であれ

本校の現状

- ・明るく素直な生徒が多い。
- ・家庭環境が複雑で、社会性に乏しく、コミュニケーション能力の不足から、人間関係をうまく構築できない生徒や、いじめや不登校等を経験してきたことにより、不安や問題を抱えている生徒がみられる。

本校の取組の特徴

- ①「Q-U」、「ほっと」等のアセスメント及び個別面談の実施。
- ②SCと連携した、自殺予防のための取組や生徒の自己肯定感を高めるための授業の実施。
- ③SCによる生徒への個別カウンセリング及び教員へのカンファレンスの実施。
- ④地域や外部機関と連携した取組におけるコミュニケーションスキルを活用する場面の設定。

取組の経過

実施月日	実施内容	身に付けさせたい力			対象学年
		A	B	C	
4月16日～20日	担任による個別面談	○		○	1学年
4月22日～5月5日	担任及び学年教員による個別面談	○		○	全学年
5月23日	「Q-U」実施				全学年
6月7日	校内研修会：「Q-U」を活用した学級経営と生徒理解				教職員
6月12日～16日	「Q-U」を活用した担任、副担任による個別面談Ⅱ	○		○	全学年
6月19日	★SCによる「心の授業」（自殺予防プログラム）	○		○	1学年
6月20日 12月4日	SCによる「ピア・サポート」の授業Ⅰ/Ⅱ（自殺予防プログラム）	○	○	○	1学年
6月26日・28日	保健師による命の授業と赤ちゃん交流Ⅰ/Ⅱ	○	○		2学年
7月2日	交通安全街頭啓発&ゴミ拾い	○	○		生徒会
7月3日	SCによる「心の授業」（自殺予防プログラム）	○	○	○	2学年
7月11日 9月20日 10月12日	白糠養護学校高等部との交流Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ	○	○		3学年
7月14日～15日	学校祭	○	○		全学年
7月19日	デートDV防止講座（自殺予防プログラム）		○	○	全学年
7月20日	地域町内会と連携した花壇植栽ボランティア	○	○		地域交流委員会・希望者
7月24日	「ほっと」実施				1学年
9月27日 11月30日	★幼児との交流（二葉幼稚園）Ⅰ/Ⅱ	○	○		2学年

※身に付けさせたい力 【 A 人間関係を形成する力 B コミュニケーション能力 C 援助希求的態度 】

取組の内容

1 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組

- (1)ねらい ①幼児との交流を通して、他者との関わり、共感する態度を育てる。
②地域の一員として、他者と関わり合い支え合って生きていくことの必要性を理解する。
- (2)対象 2学年（9月及び11月に実施）
- (3)内容 1回目：幼稚園への訪問（幼稚園が計画した内容で幼児と交流）
- (3)内容 2回目：園児の来校（幼児が楽しめるように生徒が企画した内容で交流）
- (4)成果 授業後の振り返りでは、「話しかけたら笑顔になってくれたので嬉しかった」「言葉遣いに気を付けた」「子どもがケガをしないように、気を遣った」等の記述が見られ、幼児の言動に気を付けながら積極的にコミュニケーションをとったことが分かった。



2 自殺予防教育の取組

- (1)ねらい ①こころの仕組みと、ストレス及びストレスマネジメントについて理解する。
②思春期における心の揺れ（自殺含む）とその対処法について理解する。
- (2)対象 第1学年（6月に実施）
- (3)内容 こころの仕組みを学んだ後、ストレスチェックとストレスコーピングを通して、自分に適した対処の仕方を知るとともに、自殺の予防を含めて、心が揺れた時に誰かに相談することの大切さ、また、呼吸法などの演習をとおして心を落ち着けるための具体的な方法を学んだ。
- (4)成果 授業後の生徒からは、「自分のストレス度が分かった。呼吸法を試したい」「色々なことをストレスだと自分で決めつけてしまう傾向があることが分かった」「ストレスの解消法を知ることができてよかった」等の感想が多く寄せられた。また参加した教員からは「有効な指導であり非常に参考になった」との感想が寄せられた。



3 スクールカウンセラーによる支援

- (1)ねらい ①ピア・サポートの学習を通してコミュニケーション能力を高める。
②自殺予防の観点から「言葉」の大切さに気付かせる。
- (2)対象 第1学年（6月及び12月に実施）
- (3)内容 オウム返しやカタルタなどのグループエンカウンターを通して、あたたかい人間関係をつくるための言葉かけ、仲間づくりについて学んだ。
- (4)成果 授業後の振り返りシートには、「話の上手な続け方や聴き方が分かった」「人は普段教室で見る面と違った面があることが分かった。楽しかった。」「やはりコミュニケーションって大事だと思った。みんな打ち解けることができたと思う」等の感想が寄せられた。

次年度に向けて

1 成果の検証

(1) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果（「ほっと」による検証を含む）

- ・5月に実施した「Q-U」の結果は、学級満足群 38.8%、非承認群 27.2%、侵害行為認知群 10.7%不満足群 23.3%だった。研修会では、「Q-U」の結果をもとにした集団づくりについて学年毎に検討した。3学年ではグループ協議で出たアイデアを学校祭の準備の場面で活用し、成果をあげることができた。
- ・7月に1学年を対象に実施した「ほっと」では、「相談」の項目の数値が高かった。個別面談を繰り返し行ったことで、人に相談しようとする力を身に付けることができた。一方、「緊張」の項目の値が比較的低いことから、失敗が認められるような学級の雰囲気づくり、人間関係づくりに向けた取組の工夫が必要であることが分かり、その後の取組で意識的に改善を図った。

(2) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

- ・1学年における中途退学者数がここ数年で大きく減少している。
- ※ H26年度：10人 → H27年度：12人 → H28年度：1人 → H29年度：4人 → H30年度：3人
- ・いじめについては、前年度より多くの件数を認知した。また、個別面談やクラスでの働きかけなど解消に向けた取組を実施した。
- ※ H26年度：2件 → H27年度：0件 → H28年度：0件 → H29年度：1件 → H30年度：12件

(3) 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組による生徒の変容

- ・1学年では、SCの協力のもと、自殺の予防に関する授業やコミュニケーション能力の育成を目的とした授業のほか、継続的に実施した面談を通して援助希求的態度や、コミュニケーション能力が向上したことが「ほっと」の結果から分かった。
- ・2学年、3学年では、特別支援学校や幼稚園との交流事業、赤ちゃんとの交流、地域と合同の避難訓練、花壇栽植等を通して、身に付けたコミュニケーションスキルを活用し、積極的に人と関わろうとする生徒が増えた。

(4) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

- ・全教員が、本プログラムの目的を理解し、「Q-U」や「ほっと」によるアセスメント結果を共有することで、本校の生徒の強みや弱点を把握し、意識的にコミュニケーション能力を育成することができた。

2 課題

- ・SCを主軸とした取組を展開しているため、取組の継続にSCが必要不可欠である。
- ・アセスメントツールである「Q-U」や「ほっと」を効果的に活用するために、毎年継続して研修会を実施していく必要がある。

3 次年度に向けて

- ・今年度同様、SCと連携しながら生徒理解を深め、生徒のコミュニケーション能力を高める取組を継続する。
- ・アセスメントツールである、「Q-U」や「ほっと」を効果的に活用するために、研修会を継続する。

高校生ステップアップ・プログラム実施要項

(平成25年5月17日学校教育局長決定)
(平成28年5月20日一部改正)
(平成30年4月6日一部改正)

1 趣旨

高校生の不登校や中途退学の事由として、「人間関係をうまく保てない」など、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものがあり、心の不安定さから不登校や中途退学につながる場合が少なくない。また、本道においても、児童生徒の自殺が少なからず発生しており、北海道学校保健審議会の調査では、自殺や死について考える児童生徒が一定程度いるという結果が出ていることから、児童生徒等の自殺予防に関する正しい知識や援助希求の重要性に関する認識を高める必要がある。

このような状況を改善し、道立高等学校における不登校や中途退学の未然防止、自殺の予防を図るため、生徒の心の健康に係る早期の問題認識や援助希求的態度の育成を図る取組、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組の実践及び教員への普及を図る「高校生ステップアップ・プログラム」(以下「プログラム」という。)を実施し、その成果等を全道に普及する。

2 事業の実施主体

北海道教育委員会(以下「委員会」という。)は、文部科学省の委託を受けて事業を実施する。

3 事業の内容

(1) 高等学校の取組

ア 人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組の実施

実施校は、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るため、次のA及びBを実施する。

A コミュニケーションスキルを育成するためのトレーニングの実施【質の向上】

《具体例》

- 人間関係づくりを支援する集団カウンセリング
- コミュニケーションスキルを育成するトレーニング
- 望ましいコミュニケーションについて考える取組
 - ・構成的グループエンカウンター
 - ・ピア・サポート活動
 - ・ソーシャルスキルトレーニング
 - ・アサーショントレーニング
 - ・アンガーマネジメント
 - ・ロールプレイ など
- トレーニングの実施に向けた校内研修の開催
 - ・事例研究
 - ・外部講師による講演 など

B コミュニケーションスキルを生かす機会の確保【量の確保】

《具体例》

- コミュニケーション能力を育む活動
 - ・学校行事やホームルーム活動、生徒会活動における実践
 - ・教科・科目等におけるペアワークやグループ学習などの言語活動の実践
 - ・有志による映画やアニメーション制作をとおした実践 など
- 学校間(異校種)連携や地域連携の取組
 - ・小学校や中学校、特別支援学校との異校種連携による取組
 - ・介護施設における異世代交流による取組 など
- ピア・サポート活動
 - ・ピア・サポーターによる支援活動
 - ・小・中学校へのサポート活動 など

イ 自殺予防教育の取組の実施

実施校は、生徒の心の健康に係る早期の問題認識や援助希求的態度の育成を図る取組など、自殺予防教育の取組を実施する。

ウ 成果の検証

実施校は、本プログラムの成果を、次の(ア)から(エ)の項目により検証する。

(ア) 生徒の学校生活や学級環境適応感、学級満足度、人間関係形成能力、コミュニケーション能力等に関するアセスメント結果

実施校は、年2～3回程度(例：各学期、年度当初・年度末)実施し、上記アに掲げる取組の成果を検証する。ただし、検証するアセスメントには、子ども理解支援ツール「ほっと」を含めることとする。

【アセスメントの例】

- ・子ども理解支援ツール「ほっと」
- ・学級環境適応調査(通称：ASSESS(アセス))
- ・Q-Uテスト(経費は、本プログラム対象外)
- ・その他、スクールカウンセラーが提供するアセスメント手法等

(イ) 不登校生徒数及び中途退学者数、いじめの認知件数及び解消率

(ウ) その他の生徒の状況

- ・上記アのAにおける生徒のシェアリング(感想)
- ・上記アのBにおける生徒の活動状況

(エ) 本プログラムに対する教員の理解や取組状況

エ スクールカウンセラーによる支援

実施校は、必要に応じて、生徒のコミュニケーションスキルの育成や、よりよい学級集団づくり等を支援する大学教員等の専門家(以下「スクールカウンセラー」という。)を活用し、生徒への集団カウンセリングやアセスメントの実施及び実施のための指導助言、教員研修等を行うことができる。

ただし、スクールカウンセラーの活用時間数については予算の範囲内とする。

オ 学校プログラムの作成

実施校は、上記ア～エの内容、成果や課題、参考資料等を取りまとめた学校プログラムを作成する。

(2) 委員会の取組

ア 運営協議会の開催

委員会は、本プログラムの円滑な実施に資するため、実施校の職員、スクールカウンセラー、所管教育局高等学校教育指導班担当指導主事等の参加を得て運営協議会を開催する。

イ 集団カウンセリング研修会の開催

委員会は、実施校における取組の充実を図るため、実施校の教員等を対象に集団カウンセリング研修会を開催する。

ウ 取組状況の広報

委員会は、全道立高等学校における不登校や中途退学の未然防止、自殺予防の取組の充実に役立てるため、本プログラムの取組状況の広報に努める。

エ TV会議システムによる支援

委員会は、スクールカウンセラーの継続的な派遣が困難な地域に対し、3(1)アのAの実施について、スクールネットを活用したTV会議システムにより支援する。

ただし、実施校数には限りがあること。

4 事業実施に当たっての留意事項

(1) 実施校は、生徒のコミュニケーション能力の育成を図るため、計画的・継続的な取組を実施すること。

(2) 実施校は、スクールカウンセラーによる予防的・開発的教育相談の手法や集団カウンセリング、アセスメントに関する教員研修を実施し、知識や手法の習得の他、本プログラムに関する教員間の共通理解を深めること。

(3) 実施校は、本プログラムを通して、教員が予防的・開発的教育相談の手法に基づく集団カウンセリング等の取組を実践し、又はその手法を習得し、事業終了後においても生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図る取組を実施するよう努めること。

- (4) 高校1年生に重点を置いて本プログラムを実施する場合は、宿泊研修において、仲間づくり支援やコミュニケーションスキルを育成する集団カウンセリングを実施すること。
また、国立・道立青少年教育施設において宿泊研修を実施する場合は、当該施設職員と連携し、集団カウンセリングを実施すること。
- (5) スクールカウンセラーによる生徒への集団カウンセリングや教員研修は貴重な機会であることから、実施校は支障のない範囲内で、近隣校と連携して実施してよいこと。
また、この取組をきっかけに、実施校は近隣校とともに、3(1)アのBに掲げる「コミュニケーションスキルを生かす機会の確保」を図るなど、発展的な取組に努めること。
- (6) スクールカウンセラーの活用については、次の事項に留意すること。
ア スクールカウンセラーの人材確保については、実施校が行うこと。ただし、必要に応じて委員会が協力すること。
イ 予防的・開発的教育相談の手法は多様であることから、必要に応じて複数のスクールカウンセラーを活用してよいこと。
ウ スクールカウンセラーの任用、報酬等の支給事務等については、「スクールカウンセラー取扱要領」（平成26年3月31日教育長一部改正）によること。

5 実施期間

原則として1か年とする。

ただし、1年を超えて継続の希望がある場合は、取組状況や事業成果等に基づき委員会が継続を決定する。

6 事業の実施手続

- (1) 事業の実施を希望する道立高等学校は、実施計画書（別記様式1）及び所要経費計画書（別記様式2）を添付し、委員会に申請する。
- (2) 委員会は、上記(1)により提出された実施計画書等の内容を審査し、実施校を決定する。
- (3) 実施校は、実施計画書等の内容を変更する場合は、速やかに委員会に報告し、その指示を受けること。

7 事業の報告

- (1) 実施校は、実施報告書及び所要経費報告書を作成し、当該年度の2月末日までに、委員会に提出すること。
- (2) 支出関係書類については、他の経費と区分して適当な帳簿を用いて整理し、使途を明らかにするものとし、事業を実施した翌年度から5年間保存すること。

8 その他

- (1) 委員会は、必要に応じ、事業の実施状況及び経理状況等について実態調査を行うこと。
- (2) この要項に定めのないものは、委員会及び実施校が協議の上、決定すること。

附 則

この要項は、平成25年5月17日から施行する。

この要項は、平成28年5月20日から施行する。

この要項は、平成30年4月6日から施行する。